
Sacrifice

サンタさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sacrifice

【NZコード】

N9789R

【作者名】

サンタさん

【あらすじ】

不真面目、やる気無し、駄目人間・・・

生きていればそれでいいのです

「これは誰しもが知るマブラヴの世界でも、ちょっと違うのは変な男がいること

・・・あまり影響力は無いけど

・・・べつたん、べつたん、べつたん
リズミカルな乾いた音が部屋に響く
いや、ぶつちやけ”べつたん”じゃなくて、本人としてはダン！ダン！
ン！と、何に対しても憎んでいるのかは知らないが、気合いの籠もつた力で山の様に積み重なった書類にハンコを押し続ける
・・・一つ聞きたいんだけど？」

「ん？ 何？」

「いや、何つて・・・俺の本業は”衛士”なんだけど?
なーんでハンコ押し要員として使われているですか？」

「べつに良いじゃない

アンタの衛士の実力つて7割が周囲の勘違いで、残りの2割のうち1割が運で、最後の1割のうち半分が戦術機の性能で成り立つてゐるから誰も困らないわよ」

「俺自身の実力が0・5%程度かよ・・・」

「否定は出来ないじゃない？」

「帰つて良いか？」

「それ全部終つたらね～」

「・・・そしてもう一つ

「まだ何かあんの？」

「何で肝心のお前はくつろいでいるワケ？」

「何で天才の私がハンコ押ししなきゃならないわけ？」

「自称だらうが、仕事しろ」

「つつさいわねえ、このポンコツ人間」

「そこは凡人つて言つてくれると、大分違うぞ？」

「あんたには贅沢だわ」

「……仕事のモチベーションに影響が出ました
今から効率が著しく低下します」

「じゃあ、今からアンタの階級3個くらい落とすわ」

「まさか～ハンコ押し最高ですよ～」

「じゃ、これ追加ね」

「……」

……どうやら、俺の田の前で偉そうに座つてこむる女には血の代わりに、寒冷地仕様オイルが流れているようだ
誰かコイツ……香月夕呼に”気遣い”と言つ言葉を辞書から引っ張つてきて叩き込んでくれ

「畜生め！やつてやるよーー！」

俺はハンコ2個取り出す

ここからはリーサルウエポン、Dual Hanakoを発動する！！

これでスピードは2倍になる……多分

「丁寧にやんないと最初からやり直しね」

「……へいへい」

べつたん、べつたん……通常のスピードに戻つてしまつた

「（くそ、これじゃいつまで経つても終わんねえぞ……しかも、つまんねえし飽きてきた）」

……そうだ、これで何かしらの曲を作り

現実逃避とか言つたヤツ、今からハイヴに突つ込んで
さて、どんな曲にしてやる？か……

べつたん、べつたん、つるべつたん、社の胸も、つるべつたん、

メロス！！

「ふろんぱんー!?」

だ、誰だこのヤロウめ！

俺は後ろを振り向く、するとそこには . . .

「 . . . 」

「 . . . 」

ぶ、分厚い本を携えた幼女だと . . .

メゴス!!

「んぱろんぱー?何する社!」

「セクハラ . . . です」

「セクハラ以前にお前幼J . . . 何でもないよ~
君は立派なレディーだよ~」

「 . . . 」

「 . . . なーんて言つと思つたか! 幼女め!!」

レディーといつ葉は、お前に百億兆年早いわ! 出直してこ . . .

メゴス!!

「ぐあ! . . . 今のが一番効いたぜ」

「何馬鹿な事やつてんのよ、重^{じさゆ}」

「 . . . 社が公務妨害を敢行してるんですけど?」

「アンタがろくな事考えていないからでしょ、ほら、仕事終了よ」

「おお、慈悲をくれるのか? ありがたや、ありがたや、夕呼大明神
じや、帰るわ」

「待ちなさい」

ガシ! つと襟首を捕まれる

この女、狙つてやってないか?

「まだあんの?」

「あるも何も……帝国から手紙よ」

「俺は嫌だぞ……あそこだけには行きたくねえ……」

「まだ何も言つてないわよ」

「嫌だ……何が悲しくて、お天道様が完全に上らないうちから働く地獄へ身投げせにやならんのだ……」

「しようがないじやない、上層部の決定なんだから」

「『』、後生だ……この際ハンノ押しでも何でもやつてやる……だからあそこだけは……ハツ！ 分かつたぞ！ 嶽谷のクソ野郎の根回しだな！？」

「あら、そこまで分かっているなら話は早いわね
さつさと逝つてきなさい」

「誤字発見！？」

「アンタ、本業は衛士だつていつたでしょ？」「

「言つたとも！ でも、この際だから階級を一瞬だけ3つ、いや5つ位落として！ そうすれば何とかなる！……」

「ああ、もうグダグダとうさこわねえ

さつさと支度しなさい、この無氣力怠慢黙日人間でないと、アンタのあんな事やこんな事を基地中に広めるわよ

「それ殆どデマだろうが！」「

「別に私は構わないわよ？」「

私の発言と大尉であるアンタの解釈……さて、みんなどうりを信じるのかしらねえ」

「こ、この鬼！ お前には血も涙も無いのか……」

「生憎アンタにはこれっぽっちも向ける余裕は無いわね

「く、くそ！ お先が真っ暗だ」

「分かつたなら支度しなさい」

「……分かつたよ、やつやいいんだろ？ やつてやらあ畜生め

「分かれば良いのよ」

「んじゃ、俺は戻るわ」

「はいはい頑張ってねえ～」

あそこだけはホントに勘弁して欲しいなー

まあ、俺も一軍人として頑張りますか・・・でも、やっぱ嫌だわ

あそこはバケモノの巣窟だからなあ・・・下手すりや死ぬわ

俺？俺か

俺の名前は神無月重かんなづきじげる

男盛りの39歳だ

おっさんとか言ったやつ、後でちよつと来いや・・・スミマセン、

嘘です

これからも、なにとぞヨロシク

いじ ち

みんなが右に行けば、自分も右に行く
みんなが左と言えば、自分も左と言つ
みんなに着いていくのは楽だから良いけど、時々思ったことがある
もし、みんなとは逆の方が気になつたらどうすれば良いんだろう？

重 side

はーい、こんにちわ

国民を影から支え続けるみんなのヒーロー重お兄さんだよー
昼夜問わず、平和を齎かすB E T A から日本を守り続けているのサ
まあ、B E T A つてのは略称で本名は、” Beings of t
he Extra Terrestrial origin wh
ich is Adversary of human race
”とかいう長つたらしい名前なのだ

取り敢ず、名付けた学者に一言言います

ばーか、ばーか！長すぎんだよー普通に” 宇宙人” でいいじゃん、
何カツコつけてんだよ！ばあか！

. . ふう、ちょっとスッキリした
でもこなんなんじゃ、まだまだなあ
なんたつて、帝都に異動だぜ？

あそこには鬼が住むつて噂だ . . 何でも緑色の髪の毛を生やした
双子みたいにそっくりな赤鬼が2人いたり、まるでこれダイヤモン
ドジやねえのつて位堅い性格の長い黒髪を結つた鬼があそこを根城
にしているんだよなあ . . あとついでに眼鏡掛けた角刈りの小う
るさい野郎もいたな

心境は鬼退治に行く桃太郎じゃなくて、貢ぎ物の村人Aです

どう考へても四面楚歌だろ

あそこのみんなは横浜嫌いだからな、特にあの女のせいでもシナのは、巖谷と紅蓮と鎧衣、珠瀬のロリペドジジイくらいかな
平均年齢高すぎじゃないか……？戦力的に不安になつてきた
「まずいな……」

「何がまずいんですか？」

「ん？ 聞き覚えのあるこの声は、もしゃ……」

振り向いてみると、そこには……

おお！ 神は我を見放してはいなかつた！

俺の中での女神様、あの性悪女が魔女なら、この女性、神富司まりもはそれに立ち向かう穢れを

しらない聖女様だ

神様！ 今から貴方の信者となります！ お賽銭でもお布施でも何でも捧げます！ さあ、そこあなたも

如何かな？

「聞いてくれよ、あの性悪女が俺を生け贋に捧げようとしているのですよ」

「そ、そうなのですか……というか顔が近いです、大尉」

「おお、スマンスマンつい昔の癖で」

「はあ……もう、今は任務中よ神無月先輩」

「そうそう、その響き良いね」

「取り敢ず、PXに行きましそう、話はそこで聞くわ

「さんせー」

2人でPXへと続く廊下を歩く

まるもの隣に俺以外の誰かが歩いていたら、速攻戦術機で駆けつけて八つ裂きにしてやるぜ

人生の勝ち組気分を味わっていたが、次の瞬間絶望が俺を襲つたそれはPXに着いてからであつた、2人で座る席を探していると、見慣れたヤツがいた、それも悪い方向の……その内の1人が俺に気づく

「あーあれ大尉じゃん？おーい！」
「…………」

俺は必然的にこめかみを手で押さえる、よつによつてこいつ等とは
・
・

神はどうやら裏切ったようだ、裏切るために信用させる・・・悪魔
の所業だぜ、こりや

「ちょっとお、無視しないでよ、大尉
あ！神官司教官、お久しぶりです」

何なんだ？この温度差は
・
・

いや、何でコイツがこんな所にいる？

「神官司教官、大尉に何かされなかつた？コイツは
・
・

「スーパーチヨップ！！」

「痛！？どこら辺がスーパー！？て言つか何すんのよ！？」

「やがましい！何でお転婆娘がこんな所でおせんべい囁つてんだよ
！」

「何よ！おせんべいって、聞いたこと無いわよ！」

「ぐぬぬ・・・これが神の与えた試練か、ならば俺は神と戦つてみ
せようぞ！」

「ワケ分かんないこと言つてないで、大尉は仕事したらどうなの？

駄目人間」

「その駄目人間の下にいるのはお前だけじゃ、速瀬

「い、言つてくれるわね
・
・

「とかお前も仕事してないじやん

やーい、やーい、サボリ、職務怠慢、胸だけ優秀なガキンチヨ娘

「ＫＯ・ＲＯ・ＳＵ
・
・

「おつ？何だ？やんのか？

光榮に思え、上官である俺が直々に相手してやんよ

第一ラウンド開始だ！

見えないコングが音を鳴らしたのは氣のせいでは無いはず
開始そうやう流れるようなコンボ技を繰り出す速瀬

フ・・・中々やるな、しかし、それで俺を倒すなんざ煮詰めた砂糖にバニラパウダーを振りかけるより甘すぎるぜ！

「アンタと違つてこつちは任務帰りなのよ！…」

「奇遇だな、俺も先程ハンコ押しという重要任務から帰つてきたところだ」

「馬鹿にしてんでしょう！…」

「当たり前だ！ミスの許されない状況下でのハンコ押しだ！お前のやつているような偵察とはワケが違う！」

「うがー！…良いから一発殴らせる！…」

はははは、直ぐ怒るのはお前の悪い癖だ

若さというのはどうしようもないな、もつと心に余裕を持たなければダメだぞ？

「隙あり！」

「何！？、ぐえ！…」

は、鼻つ柱に回し蹴りHIT！2300のダメージを受けた！

某RPG初期場面では大ダメージだぞ！？

だ、だが戦いは始まつたばかり、これから怒濤の反撃が始まると

まりもside

目の前で神無月君と、かつての教え子、速瀬水月による格闘戦を繰り広げている

勿論2人とも本気じやない、挨拶のようなものだ

「あ、伊隅大尉」

「ウソ！？」

「ウソだよ、ばーか！隙あり！…」

「え？きやあ！」

・・・しかし、若い女の子にクロスチョップで飛びかかっている神無月先輩は正直変態にしか見えない

今年で確か、40歳なのに……昔から何も変わっていないのね
そのまま寝技に持ち込む、それはやりすぎじゃ……本当に捕まる
わよ、色んな意味で

「や……この、放せ！」

「フハハハ！どうだ？抜けるものなら抜いてみろ！」

「この変態！エロおやじ！放せって言つてるでしょ」が！

「ん~？聞こえないなあ、おにいさん生憎と耳が遠くてね」

更にきわどい体勢となる、傍から見たら既に強姦もの
一緒にいるA-O1の反応も様々

「はわわわ、水月」

涼宮遙は、赤くなつた顔を手で覆いながらも隙間からちらりちらりと見
ている

「ちょ、ちょっと、誰か止めなさいよ」

涼宮茜は、姉の状況を見てあたふたしている
「さすが大尉、変態ぶりは今日も健在ですね」
からからと笑いながら宗像は、どこからともなくカメラを取り出し、
撮影を開始する

「宗像、こんな状況で何やつていい」

風間は宗像をたしなめるように言つているが、宗像は止める気配は
ない

「通報しますよか？その分、今いる大尉の席が空きますよ？」
柏木は冗談なのか、本気なのか分からぬことを言つ
他の築地、高原、麻倉は共に半笑いか苦笑いで見守つてゐる
そ、そもそも誰か止めないと……

「随分と騒々しいな？」

その時、騒がしいPX内に凜とした声が響き渡る

「伊隅大尉！」

「……またあいつか」

呆れたような声を出すのも仕方ないと思つ

重 side

フハハハハ！

遂に来たぜ、マイ・ジエネレーションが！
この頃負け越していたからな、日頃の恨みを込めながらこのまま屈服させて . . .

メゴス！！

「あぶろぱー？だ、誰だ！我が栄光の霸道を邪魔する不貞な輩は！」「私の部下に何をやつている」

「伊隅大尉！？」

「チツ

伊隅四天王のN.O. . 2か、予想以上に早かつたな

メゴス！！

「ぐあ！何する！」

「何だ？その物騒な名称は」

「いやお前自体武器が擬人化した . . .」

「 . . . 速瀬、少しどいてろ

あと宗像、そこにある椅子を取ってくれ」

「了解」

「冗談に決まってるじゃないですか～」

「残念だ、もう遅い」

撲！！

「ぐえ！」

「い、伊隅大尉、やりすぎでは？」

「神富司軍曹、心配はいらない

」の男、その程度では死にはすまい

「殺・す・気・か！」

「．．．本当ですね」

「当たり前だ」

「くそぅ．．．糖分だ、この女と戦うには糖分が圧倒的に足りない
おばちゃん！トロピカルパフューム！」

「そんなメニュー無いよ！」

と言うか、あんたの健康診断で血糖値があり得ない数値を叩き出してんだ

あつたとしても出さないよ！」

「そんな薄情な事言わんといで、俺とお姉さんとの仲じゃん

「もうその言葉には騙されないよ」

「．．．チ、聰いババアめ、何時の間に学習しやがった？」

「なんか言つたかい？」

「何でもないよ」だ

「大尉」

「任せてください」

「ん？」

撲！！

「ぐえ！」

「その前にお前は仕事しろ

副指令から帝都異動を命じられていたんじゃないかな？」

「え！ そうなの！？」

「何か問題があるのか？速瀬

「い、いえ、何でもありません」

「あ？ それがどうした？」

「早く出発の準備しないと、副指令の」とだ、簡単に予想はつかないか？」

「……つく」

「なら、こんなところで漫才に興じて良いのか？」

「お、覚えてるー。お前に言われて準備するんじゃないんだからなー！」

「分かったから、サッカとしたらどうだ？」

「こん畜生め！」

本当に覚えてるー。いつか借りは返すー。

と、言いやびれてPXをBダッシュユで後ににする

そんな口調、舌かんで言えんわ

．．．それにもしても、暫くここは止めよならかあ

ちょっと寂しい

ほんのちゅうどだけだな？

にい

人間つて、自分の損失に敏感な生き物だ
例えば、どんな慈善行為でも結局は誰かに見返りを求めてしまつ
でも、それが入つてものだろ？俺だつて、ただ働きは嫌だし・・・

重 side

はあ・・・

どつも、毎度ありがとうございます

神無月印の重食品です

とうとう帝都異動の瞬間がやつて参りました

俺は鬼さん達に引きちぎられて、内蔵はオモチャ代わりにさせられるようです

なに？大袈裟だと？

馬鹿言え、俺が帝都でなんて呼ばれているか知つてるか？

結構沢山あるが、大きく分けて3つある

”臆病者”、”裏切り者”、”売国奴”

こんな感じで言われている

要は、日本人の面汚し・・・これがプライドの高い連中の言い分だ
別に否定はしない、多分過去の経験を言つていいんだから仕方ない
否定するだけの材料もないし、何より田の前に佇む”コレ”も原因

している

何時だったか、夕呼に突然呼び出されたかと思うと、急に田の前の
コレに乗れと言つてきた

何でも、米国からの手土産らしいが、こんな物を送りつける米国の
考えていることが分からん

これまでから察するとおり、コレとは戦術機である

しかし、問題はそこではない

問題は米国“”自慢の戦術機、F-22A・ラプターのプロトタイプ、
2機造られた内の1機 . . . ” N22YF ” であるからだ

「 . . . 」

マジで勘弁して欲しい

なんでこんなある意味、国家のトップシークレット級の代物を送り
つけてくるかなあ . . . 何か裏では色々と汚い思惑が渦巻いてそうだ

. . . 何だか、この戦術機も汚く見えてきたぞ？

血のように赤いカラーリングも相まって不気味に見えてきたぜ

よりによつて赤だからな、周囲の視線が痛いぜ

穴だらけになりそだ . . . 主に俺の胃が

. . . て言うか何時から赤になつたんだっけ？

最初にご対面したときはスカイブルーだったのに、次の日にはあら
不思議

まったく逆の深い赤に早変わり . . . あのクソ女、一体どんなマジ
ックを使いやがった？

これがもつと明るい赤だとまだ良いが、この赤は本当に血のようない
のだ

まるで誰かの返り血を浴びたよつに . . . と言つかもうコレ完全に
誰かの血じゃね？

あの女も遂にトチ狂つたか . . . かわいそうに

. . . 待てよ、とすると後々アイツのとばっちりが俺にも降りかかる
のか？

やつべえ、また国外逃亡してえな . . . いやそんなことしたら、今
度こそ殺される

やっぱあの時帰つてこなければ良かつた、何が帝国のピンチだよこ
ん畜生 . . .

帰つて早々頑張つて戦つたつてのに、作戦終了後に拘束されて軍法
会議にかけられるわ、そこを旧友のあの女に拾われて毎日扱き使わ
れる地獄を味あわせられるわ、全然良いことねー

ホント、どうするかなあ . . .

日本帝国陸軍技術廠

巖谷 side

彼を知るものは、皆口を揃えてこう呼ぶ

”臆病者” . . . と

彼の訓練生時代を知る教官ですら、100年に1人いるかいなかの”出来損ない”だそうだ

まあ、あいつはよく訓練を抜け出したり、サボつたりしていたからな . . . ある意味自業自得と言える

しかし、軍の連中に必要以上に嫌われる理由は別にある

あいつ、神無月重は戦術機の応用課程が修了した後、突然国外逃亡 . . . つまり、亡命したのだ

あいつにも色々理由はあったのだろう . . . しかし、けろっとした顔で帰ってきたときには度肝を抜かれた

昔からの知り合いである俺は、あいつにこう言つた「死ぬ気か?」としかし、あいつも通りのとぼけた顔をして「だつて、ピンチなんだろ?俺だつて日本人だぜ?例え一度棄てた祖国でも、恋しくなつて帰つてくるときはあるさ」と、呑気に抜かした

何でも亡命した後は、大した職にありつけなかつたからと言つて各国を転々しながら戦術機を借りて前線でBETAを相手にしていたらしい . . . ホントかどうかは知らんが

さて、話を戻すが、作戦終了後のあいつは案の定拘束された

銃殺刑になりそうだったところを、横浜基地の副指令があいつの身柄を引き取つた

何でも、俺よりももつと昔の知り合いらしいが . . .

まったく、凄いんだか、そうじやないんだか分からぬのがあいつの困ったところだ

「やれやれ」

その問題児が帝都に来るんだ、味方くらいはしてやるわ
あいつへの風当たりは最悪だが、めげるなよ・・・重

重 side

やべーよ、来ちまつたよ
どうすんだよこれ・・・

まずは巖谷のところに行かないで、いつ後ろから刺されるか分かつ
たもんじゃねえ

さて、問題はどうやって巖谷のいる建物へ潜入するかだ
ここは帝都、当然顔見知りと鉢合わせする可能性が高い
他のヤツはまだしも、特に月詠姉妹や沙霧の頭でつかひとうつかり
会つたなんてしたら洒落にならねえ・・・
し、仕方ない・・・動かなければ何も始まらないしな、腹を括つて
潜入するか

・・・したのは良いのだが、現在俺は身動きが取れない
「どうすんのよ、これ」

何故かというと、建物内に入ったのは良かつたが、人の往来が激し
すぎるのだ

咄嗟に近くの物置部屋に入つて鍵を掛けたが、人は増えるばかり・・・
・あれよあれよという間に身動きが取れなくなつてしまつた

「お前ら仕事しろよ・・・」

演習でも何でも好きにしてくれ、俺に被害が及ばなければいくらで
もやつてればいいのに・・・

そんな呪詛を心の中で吐きながら、暫く息を潜めていると・・・

「！（お、鎧衣！良いところに来た！）」

帝国なんたら省の課長である鎧衣が目の前を通つた
よっしゃ！「イツが来たからにはもう安心・・・

「これは……月詠中尉、任務ご苦労様です」

「！」

「左近殿か、苦労を掛ける」

ま、まじかよ……赤鬼の片割れがそこにいんのか?
迂闊に飛び出さなくて良かつたぜ

「 - - - 」

「 - - - 」

2人はそこで会話を始める

「難去つてまた一難……苦労が絶えないぜ

「……そう言えば、左近殿はご存じないだらうか?」

「何ですかな?」

「近い内、あの裏切り者が帝都に来るという情報を耳に挟んだので
すが……」

「はて、初耳ですね」

「そうですか、いや、詰まらぬ事を聞きました」

「いえいえ、滅相もない」

「……では、私はこれで」

「……月詠中尉」

「何でしょう?」

「もし、今の話が本当だとして、この帝都で彼と出会いたら……
どうしますか?」

「……然るべき報いはいつか受けて貰つ、それだけです」

「はつはつは、これは手厳しい」

「……以上です、失礼いたします」

「……だ、そうだよ、重君

安心したまえ、月詠中尉は行つたよ

ガチャリ……とドアを開き、中から出る

「あんの、クソアマ……物騒な事を言いやがる」

「相当嫌われたものだね、仕方なしと言えば仕方はないが……」

「まあ、あながち間違いじやねえけどな……」

寧ろそつちの言い分は痛いくらいに伝わってくる . . .

出来れば、和解したいとも思つ . . .

でも、今の俺には出来ない . . . それだけの勇気が無いからな

「で、どうするかね？巖谷中佐の所へ行くかい？」

「そうする」

「では、着いてきたまえ」

「はいよ」

だつたら俺は今まで良い

たとえ”裏切り者”と罵られようと、そつちの方が幾分か気が楽だからな

本当に、ダメ人間だな . . . 僕という生き物は

月詠 side

神無月重 . . .

私が、いや . . . 私たちが一生の内で唯一許すことの出来ない生き物
国外逃亡といつ守るべき祖国を棄てる愚行に及んだ脣

それだけで許し難いといつのに、ぬけぬけと帰ってきた挙げ句、この日本国内で、今でもうのうと生きている

その様を見ているだけで私は反吐が出そうになる、あの男には天誅
を下すべきだ

最早、生きている価値すらない

だと言うのに、あの男は生きている . . . 生かされている
処刑が決定した間際、突然それが取り消しとなつた

横浜の魔女が奴の身柄を引き取つたのだ . . . それを承諾した帝都

上層部

「本当に . . . 忌々しい」

あのような生き物は、此處帝国にとつて害にしかならない

いつか、奴の命は貰い受けれる

今は無理だ、そこまで私は暇ではないし、あの男に割く時間など惜しそぎる

ならば精神を切り替え、次の任務に集中しなければ . . .

さん

見たくないから田を逸らす . . .
聞きたくないから耳を塞ぐ . . .
言いたくないから口を閉ざす . . .
その気持ちは解らなくはないけど、そんなことを続けたら後悔しか
残らないぜ？
俺みたいにな . . .

重 side

どーも、毎度お馴染みの神無月重です
取り敢ず話しかけないでくれ、今はそれどころじゃない

「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」「 . . .」

力チャ力チャ . . . タン！

「それロン」

「何！？」

「はつはつは、覚悟しろ巖谷、貴様のろくな並みの寿命は俺が貰
い受ける」

「ついに巖谷も餌食となつたか」

「今日の大尉は恐ろしいっすね . . .」

当然だ整備兵Aよ、今の俺を止められる存在はどこにもいない
未だトップ独走中、箱根駅伝も今の俺なら敵無しだ！

「さあさあ、どうする？ 力モ共、大人しく掛け金全部渡してひれ伏
すか、このまま続行して軍資金が尽きてから我が軍門に下るか . . .」

まあ選べ！

まさに「者抜一！」れこそオルタネイティブだ！

．．．何を言つてんだ俺は

「くそ！このまま引き下がれるか！倍ブッショだ！！」

「はつはつは、遂に特攻隊と化したか

後腐れ無く念入りに成仏させてやる、まあ来いや……」

だがその時、ある変化が訪れた．．．

「！」

「！」

「！」

「ん？ ビツした？」

「い、いや、何でもない．．．それより」

「私は此処でお暇しよう、さらばだ」

「じゃ、じゃあ自分も仕事に戻りますんで．．．」

「？」

掛け金は手に入つたが、何か釈然としないな
うーん、なんでだろう．．．

ガシ！

「大尉、お久しぶりです」

「ん？ 誰だあ？」

ぐるり、と振り返る．．．

「（やつべえ、唯依ちゃんだ）さ、まあ仕事仕事」

「待つて下さい、どこに行くおつもりですか？」

「ど、どにひて．．．これからお仕事．．．」

「つこわづきまで麻雀をやつていたのにですか？」

「う、・・・スイマセン」

「大体あなたは……」

く、くそう・・・あの3人め、唯依ちゃんセンサーがある種の境地
達していやがつた

聞いていますか！

「ハイ！まことに申し訳ないですーー！」

「う、うー」

「回文詩」の用法

「い、イエ・・・ナニモ」

お詫教下さい。名の扱間に仕事間にモハナガセ 全般から見ても良

24

唯依 S i d e

裏切り者

それは目の前にいる彼を侮蔑する言葉だ
当然と言えば当然である

私も未だ彼を完全に許す

でも、彼は文句一つ漏らさずにそれを受け止め続けてきた

私と彼が出会った最初の頃は酷かった

ある時はハンガーの裏で煙草を吸っていたので、口から取り上げて消化した

『ああ！お、俺の相棒が！？』

『大尉、ここは禁煙となつています』

『お、仰るとおりです。』

ある時は食べ歩きをしていたので、これも取り上げて咎める」ともあつた

『大尉、飲食物の持ち込みは禁止です・・・PXへ行つて下せ』

『で、ですよねえ』

ある時は「ソ」「ソ」と人影を伺つていたので、声を掛ける」ともあつた

『大尉』

『おおうーってなんだ、唯依ちゃんか』

『なんだとは何ですか? 疲しいことが無いなら、堂々としていたらどうです?』

『まあ、そうなんだけぞさ・・・』

『はつきりして下さい』

『スマセン・・・』

多分、ほぼハツ当たりに近い感情で彼に当たつていたと思う
でも、あることが切つ掛けで、彼も相当苦惱と後悔にさいなまれ続
けていることを知つた

それは認めても良いと思つ

『どんな事をしても、過去の免罪符になるワケじゃない・・・なら、
俺はサクリファイスでいいさ』

あの時の彼は、触れれば壊れそうなほど嬌く、切なかつた・・・彼
が見せた不器用な笑みが今でも頭に蘇る

「聞いているのですか? 大尉」

「き、聞いております・・・はい」

「大体貴方は・・・」

まったく、ちょっとと田を離すとすぐこれだ・・・困つた人である
彼は・・・今まで、これからも1人で戦い続けるだろう
ならば、ここにいる間は少しくらい支えになつてあげても良いだろ
うか?

重 side

「……」
「『ジ』に行やがった、あんにゅうつむ……」
「おお、唯依ちゃん行つたか」
「行つたかじやねえよ、この野郎」
「はは、悪い悪い、随分と絞られたな？」
「限界まで絞つた後、もう一捻りしたからな
若干濡れた雑巾みたいになつちました」
多分今体重計のつたら2キログラム減つてゐる気がする
……これダイエット法として売り出せねえかな
「……それにして、唯依ちゃんのお前に対する角も随分と丸く
なつたもんだ」
「……まあな」
「どうした？ 素直に喜べよ」
「嬉しいような、そうでないような……」
「まだ氣にしてるのか？」
「当たり前だ、もう少し恨んでくれても良かつたといつのこと……」
「こいつが気まずいわ」
「お前つて『ジ』までチキンでヘタレなんだか……」
「やかましい」
「事実だろうが」
「ぐ……」
「さて、お喋りは『ジ』までにして、本題に移りつか」
「本題？」
「お前……お前わざわざ俺が麻雀やへりやめたために横浜から呼んだと思つてゐるのか？」
「仮にそうだったらお前を血祭りに上げる
どう考へても割に合わん」
「当たり前だ、まったく……」

今回呼んだのは、お前のある戦術機に関する意見を聞いたかったんだよ」

「戦術機？プロトタイプ・ラプターは無理だぞ？秘密厳守だからな、言つたら俺が殺される」「違う違う、TYPE-94・不知火だよ

お前、結構長い間乗つてだらう？」

「何だ、アレかよ．．．

簡単簡単、何というか．．．普通。みたいな？」

「根も葉もないようなこと言つたな、お前は具体的すぎるんだよ」「えーなんでだよ、もう平凡すぎて逆にケチの付けようがないんだよ

まあ、強いて言えば．．．そつだなあ、何というか．．．うん、普通。」

「結局はそれかよ！？」

「別の観点から見れば、それ以上にはならないだろ？
それ程まで極めすぎて、逆にそれがネックになつてゐるな
時代の波に押し流されそうだ、その内外国機導入とかするんじゃねえのか？」

「ふむふむ、成程．．．たまには真面目な解答が出るじゃないか

「たまにはつてなんだよ、馬鹿にしてんだろ？」

「田頃の行いを悔い改めてから言え

「酷え！？」

「他には？」

「うーん．．．ない、後は沙霧のあたまでつかちがいるだろ？
そいつに聞けよ、乗つてる年期はあいつの方が長え」

「俺、あいつ苦手

「えー具体的過ぎるだろ、お前の方が．．．

「だからこうしてお前に聞いてるんだろ？」「ダメだこのおっさん、色々な意味で間違つていい．．．

「ま、お前から真面目な意見が聞けたから良しとするか

よし、帰つて良いぞ？」

「ケンカ売つてんの！？」

「冗談冗談、ちゃんと衣食住は手配する」

「まったく……ん？」

「俺つていつ帰れんの？」

「ああ、一つ言い忘れた

お前多分その内アラスカに飛ぶ

日程は後から知らせる」

「……は？」

「そういうことで」

そう言う大事なことは早めに言ってくれよ……なんだよ、アラス

カつて

心の準備が未だ出来てねえよ……

し い

”人”は偉大だ
何だって創り出せる、どんな物でも生み出せる

”人間”は馬鹿だ
自分勝手な理由で積み上げてきた物を崩す、築き上げてきた物を壊す
同じ”ヒト”なのに、どうしてこうも違うのかねえ・・・

重 side

どーも、重です

シッ！馬鹿、声出すな！氣づかれんだろ！

「くそ！あの野郎どこ行きあがつた！？」

「 . . . 」

チツ！巖谷のヤローめ、中々しつこいな . . .
俺は嫌だぞ、アラスカなんざ行きたくな
えとつとと横浜に帰してくれ . . .

「 . . . 行つたか」

シユバツと参上、隠れていた箱から出る

馬鹿め、ステルスごっこしている俺を見つけだすなんぞ一〇〇年早い

「はつはつは、勝つた」

「何に勝ったんですか？」

「はつはつは、それはな . . . は？」

や、やつべえ . . . まさか

「 . . . 」

「 . . . 」

ゆ、唯依ちゃんだ . . . 逃げよつ

「な、何でもないですよ」

独り言独り言 . . .

「 . . . 」

「そうですか・・・。」
「な、何のことかな・・・。「見つけたああー！」 ゲツ！見つかっ
た！？」

「もう逃がさんぞ！観念しろ！」

「くそ！捕まつてたまるか！」

「唯依ちゃん！確保おー！」

「了解！」

「ズ、ズリイ！？」

「隙ありだボケ！」

「何！？」

「はつはつは！大人しくしろ！」

「い、嫌だ！俺はここに残る！」

と言つうか早く横浜に帰して！？」

「この任務が終つたらなあ！」

ズルズル大の人が引きずられる様はさぞかし絵になるだろう
気分はドナドナ、お先真つ暗闇、どこに出荷されるやら・・・アラ
ス力だつたな

-----しばりくお待ち下さい-----

「・・・もう此処まで来たら逃げねえから、この縄ほどけ」

「アラスカに着いたらな」

「て言うか何でアラスカ！？」

「俺何も聞いてないけど！」

「いいから黙つて行つてこい、お前の職業柄お得意だらうが
「どんな職業だよ」

「知つてるぞ、お前昔は”Bloody Eater（血を啜る者）
”とか呼ばれていたそうじやないか」

「そ、それだけは止めて！メツチャ恥ずかしいから！」

「ビーしょーかなーー」これ以上懸念のない帝都全員に言ふりしだ
やおうかなー！」

「ち、ちくしょー一分かったよ、行けば良いんだろ、行けば
最初からそう言えよ」

「おのれ・・・末代まで呪うぞ巖谷」

「はいはい、分かった分かった

お前の戦術機も向こうに運ぶから、そこはとにかく

「・・・【冗談じゃねえ、壊したらマジで俺が殺される

「壊さないよう頑張れ」

掛けた言葉がそれだけかよ・・・」

「お前に優しい言葉を掛けるとつけ上がるからな」

「ひでえ・・・」

「ま、死なない程度にやれ・・・それ程難しい任務でもない、正直

お前にピッタリだ」

「へいへい、んじゃ行つてくるわ」

「お土産宜しく」

「死ね」

捨て台詞を吐いてひかつきに乗る・・・飛行機のことね
やれやれ、結局乗つちましたよ
久しぶりに国外に出るな・・・
またバックレようかな・・・いや、止めとこう、流石にそれはマズ
イかな

い、いつからお氣づきになつてゐたのですか？

「ずっと前から、まつ、重（あの馬鹿）は素で氣づいていなかつた

ようだが . . .」

「 . . . 申し訳ありません」

「別に謝ることでもないだらうへ」

「 . . .」

「やつぱり心配か？」

「ツ！ そんなわけでは！！」

「わつはつはつは、怒るな怒るな

「からかわないでください！」

「 . . . まだ許せないか？ あ二つのことを

「 . . . 当然です」

「やれやれ、難儀だな」

「あの、中佐」

「何だ」

「Blood Eater」とは . . . ?

「ああ、ちょっとしたあいつの二つ名だ

「この日本じや知つてる者は少ないだろ、何故なら、あいつから

は誰も連想できなかつた

だが、国外ではちょっとした有名人さ、戦場を渡り歩いては常に

最前線で戦う . . . そんな後ろ姿が良くも悪くも、尾ひれが付いた

んだろ？」「

「 . . . なぜ、大尉は国外逃亡したのでしょうか？」

「簡単だよ、あいつの考えていることは云いようで狭く、深いよう

で浅い

大方、その頃の重は恐くなつたんだろ？ . . . 死ぬことが、あいつは特にそういうのに対して敏感だからな

「なんて情けない . . .！」

「 . . . でもな、それは誰しも抱くモノなんだよ、要はそれを克服できるか否か

戦場では出来なかつたら死に、そうでなかつたら生き残る

大抵の者は前者で散つていつてしまつ . . . だが、それは戦場と

いう一括りの中で見たものだ

だからあいつは、戦場に出ない . . . 自分が衛士として消耗され
ない国外へ逃げた

ま、結局は無駄だつたがな

「 . . . 」

「まあ、あいつ自身恨んでも構わないと言つてゐるんだ、そう深く
考えることでもないわ」

「そう . . . ですか」

「さて、重の話はこれで終りだ
ここから切り替えるぞ、簞中尉」

「ハツ！」

「これから、例の新兵器のテストを行つ

任されてくれるな？」

「了解しました！」

「つちもこつちで始めるぞ、そつちも頑張れよ . . . 重

重 side

「ぶえつくしょい！ . . . グズ . . . 」

「 . . . くしゃみが止まらん、何でだ？ 風邪か？」

まあ、いいや

「それにしても、のどかなところだね」「

いいなあ、俺ここに住みてえ . . .

ひつそりと小屋造つて川で魚釣つてればいいよ、鉄の塊動かす技術
なんてぶつちやけいらねえし

サバイバルスキルの方が欲しいところだ

あー何か森の向こうに見えてきたし……完璧基地だろ、アレ……何だっけ？ コーラン基地……だっけ？

ええい！ この際ポップコーンでもコーンポタージュでも何でもいいや
「は～……憂鬱だねえ」

まあ、頑張りますか……疲れない程度に

「遠路はるばる」「苦労様です」

「はいはいどうも、『ご苦労さん』

すると、見知った顔が一つ

「お久しぶりです」

「おお、イブラヒムの旦那！ おひわ～」

「相変わらずですね、あなたは」

「なんだ？ その堅つ苦しい挨拶は、別人みたいだぞ？」

「はあ、ここには軍ですよ、上官に敬語を使うのは当然です

「え？ 旦那の階級は何？」

「中尉です」

「勝った、俺大尉」

「それを聞いたときには俄には信じられませんでした」

「ケンカ売つてんの！？」

「冗談ですよ……トルコを出た後はどうしました？」

「……いつも通り、各地を転々としていたよヨーロッパから中東アジアまで幅広くな」

「よく生きていましたね」

「まあ……な」

「どうでしたか？」

「どう考へても俺じや力不足だ、世界中を回つたが……酷いもんだ、援軍と避難が間に合わずに田の前でBETAに滅ぼされた街さえあつた」

「そうですか……」

「まつ、辛氣くさ」話しが止めよつぜ

「そうですね、取り敢えずは屋内に」案内しましょ

「ん、ヨロシク」

「では、此方です」

と、案内された軍用ジープに乗り込む

．．．乗り心地悪ッ！

がつたんがつたんシェイクされて車酔いしそうだ

「．．．そう言えば、さつそく任務がありますよ

「ん？何？」

「護衛任務です」

「何の？」

「近い内に、西と東の広報任務があるので、万一に備えて撮影班の護衛らしいです」

「お守り役つてか？いいねえ、そういう楽な仕事は大歓迎だ」

「．．．真面目にやつてくださいよ」

「はいはい、分かつてるつて」

「はあ、これから”アルゴス試験小隊”に貴方を紹介します」

「何それ？」

「何それつて．．まあ、説明するより貴方には見せた方が早いで
しょう」

と言われた

全く意地悪な旦那だな

しかし、アラスカか．．何か楽しそうだ、任務も楽で済みそうだ
し、最高だな！

泣くな、黙つてやれ
喚くな、口を閉じろ
・・・死ぬな、ただ、それだけだ
昔、雇い先の上官に言われた言葉だ
ホントに碌でもねえ良い女だつたよ、嫁に欲しいくらいだ・・・まだ生きてつかな？

? ? ? side

「なあなあ、今日来るヤツつてどんなだらうな？」
「おつ！珍しくタリサが食い付くね～」「うつさいVG！」
「へぶ！」
「そうねえ、確か二ホンの衛士だつて耳に挟んだけど・・・」
「二ホン？じゃあ、あれか？武士道つてやつか？」
「なんだそりや」
「なんだ、しらねえのか？」
「知らん」

3人がそれぞれ話し合つていると、いきなりバン！と扉が開く
「諸君、待たせたな」

「「「！」」」
部屋にイブラヒム中尉が突然入室してきた・・・にも関わらず、3人は敬礼をこなす
腐つても軍人、そこんところはしつかりする
「今日は新しくこの隊に配属される人物を紹介する・・・スペシャルゲストだぞ

かの有名な”Blood Eater”と称される衛士だ

「「「！」」」

3人の顔色が変わる

それもその筈、Blood Eaterとは最古参に数えられる衛士の1人であり、結構有名である

神出鬼没、正体不明、現れては前線に出て戦う・・・

まるで、血を求めるように戦場を彷徨う姿から”Blood Eater”（血を啜る者）”と、いつしか呼ばれるようになつた・・・本人にはそんなつもりはなく、ただ単に身元がバレると何となくやばそつだから1つの場所に留まらずに転々としていただけで、決して血を求めているわけではない

そうとはつゆ知らず、風評とは恐ろしいモノである

「では紹介しよう・・・神無月重大尉だ」

ゴクッと、そこにいる全ての人間が喉を鳴らすしかし、名を呼ばれても入室してこない

「・・・はあ、まったくあの人は」

「・・・・・・」

「何をしているんですか？」

「え？ 何？ もう入つて良いわけ？」

「さつき貴方の名前呼びましたよね？」

「ワリイワリイ、聞いてなかつた」

「全く貴方という人は・・・さあ、入つてくださいー」

「そんな乱暴すんなよ、ソフトに扱ってくれよ」

「寧ろベリーーハードで扱つてあげます」

「いてつ！ 引つ張るな」

「では、キリキリ歩いてください」

「何に怒つてんの？」

アレか？ 格好良く紹介をしたのは良いけど、俺がタイミング良く入つていかなかつた事についてか？

「聞こえていましたね？」

「いでででで！」

「それを承知の上で入つてこなかつたと . . .」

「そうカリカリすんなよ、出来心だつたんだつて、ほり、よくあるでしょ？」

俺の中の悪魔が囁いてきたんだよ、”JJJは敢えてシカトしようぜ”つて

「ほう？ それで？」

「 . . . うん、ごめん、ふざけすぎました、ハイ」

「まつたく、では早く入つてください」

「へーい」

やる気のない声と共に入室してきたのは、何ともだらしない男性であつた

着崩した制服、顎の無精髭、霸氣の籠もつていな死人のような瞳・

お世辞にも、イメージしていた人物とは違う

「どうも、神無月重でーす

階級は大尉、別に気にしなくても良いけどね

「 . . . 」

「何だあ？ お前ら、その嫌々な沈黙は」

「（貴方のせいですよ . . . ）」

「質問するなら今のうちだぞ~

ああ、プライベートはダメね、俺こいつ見えてピコアだから

「 . . . ひ、一つ良いですか？」

「はい、その君？ ホワッツ・ゴア・ネーム？」

「ヴァ、ヴァ レリオです」

「はいはい、ヴァレリオ君ね . . . 何かな？」

質問は1人10秒くらいで済ませて貰うとお兄さんは助かるなあ

「（いやいや、あんたお兄さんどころじゃねえよ、完全におっさんだよ、そこそこ自覚してんの？）のおっさん（ . . . い、いやあ、何て言うか、イメージと違うなあつて . . . ）」

「ほりほり、どの辺りが？」

「何で云つたか、おっさんいつてホントにBloody Easterな
のか……」

ズビシ！

一
あ
だ
！

「ひとつ、俺はおっさんじゃない、”お兄さんだ”ふた一つ、その二つ恥ずかしいションベンくせこ以前、俺の前では禁句だ

「(2回振つたー?)」

分かってたか!?

「九月」

支那の伝統

「完全に今」

(完全に今嘔吐したよこの人、平然とした顔で嘔吐したよこのおつせん)は、ははは、お若いですね

「大尉、嘘を吹き込まないで貰いたい
貴方今年で40でしょう?」

「田井は俺は何が悪いでもあるの……」（やつぱりおっせんだった！？）

「特にはありませんが、復讐を薦めるのはよくない」とかと、「そんな意地悪なこと言つなんよ」

- 1 -

「何故そこで押し黙る」

「いえ、まあ、お喋りはいいまでこしようがとにかく・・・」

「ん？まだ何かあんの？」

「ええ、ちょっと歓迎会を」

「ほう、そりや楽しみだ」

「私も楽しみでなりませんよ」

重 side

『 こちらアルゴス2、さつさと掛かつて来いよ大尉殿 』

『 こちらアルゴス3、楽しみましょうぜ？大尉殿 』

『 こちらアルゴス4、いつでも行けます 』

「 . . . てめーら、何でそんなに楽しそうなんだよ」

だ、だまされた . . .

歓迎会というから楽しみにしてたら、あれよあれよと喧う間に戦術機に乗っていた

どうやら、対人模擬戦闘をやるらしいが、これアレだろ？

よく学校の先輩とかが、入り立てピチピチの小生意気な後輩を校舎裏で袋だたきにするつていう . . .

・ 所謂リンチだろ、これ

マジで旦那は俺に恨みでもあるんじゃね？

トルコ戦線にいた頃なんかしたか？俺 . . . やベーよ、逆に思いたる節があるから恐いんだけど

きっとこれを機に復讐するつもりだよ、旦那は . . .

『 およ？もしかして大尉ビビッてんの？これじやあ、Bloody Eaterも肩すかしだな』

「あーハイハイ、直ぐにぶちのめしてやるからちょっと待つてろ
て言うかお前、俺の前でその名前口にしたな、前前前のトリプルコンボ俺に言わせあがつて、お兄さん怒つちゃうぞ？」

「謝んなら今のうちだよ？ん？」

『 誰が謝るかこのおっさんめ！』

「ほつほつ、良い度胸だ、お兄さん完全に怒ったわ」

『だからおっさんだろ！？今年40の口おやじが何見栄はってんだよ！何が23だよ、見苦しいんだよ！』

「こんちきしよう！黙つて聞いてりや、おっさんおっさんつて！本人がなあ、頑張つてお兄さんつていつてんだからそれで良いじゃん！空氣読めよ！」

『ムリがありすぎるんだよ！現実と向き合へーおっさん！』

「こ、この幼女め……許さん」

『誰が幼女だ！』

「お前のことだよーお前にそ現実と向き合へーそなんなんじゃ、一生そのままだよー！」

『アタシは育ち盛りでこれからなんだよー。』

「俺も男盛りでこれからだよー！」

『もう人生の折り返し過ぎてんのにー？』

「つるさいよー！ようは気持ちのもうよつだよ、いつだつて俺は20代だ！』

『そこいらへん現実と向き合へつていつてんだよー！つまでそれ貫き通す氣だ！？』

『無論！死ぬまでー！』

『死に際に20代つて言つジジイは氣色悪いわあー！』

『何だとコラアー！お前もいづれはそなうなんだよー！』

『いい加減にしろー！』

『ー？』

『ー！』

『あー…始めても宜しいですか？』

『りよ、了解』

『はいはい、どうぞ～』

『では、状況開始！…それにしても大尉』

『何？何か用？』

『貴方がラブターに乗ると、案外シユールですね』

「つるやこよー!?」

『冗談です』

「それだけ!/?」

『失礼します』

「. . .」

くそつ、旦那め、完全に馬鹿にしてやがる
こうなつたら、頑張るしかねえじやん
これ負けたらあの幼女 + 2 に、絶対馬鹿にされる
こりやあ、負けらんねえ . . .

”努力は才能に勝る”なんて、どつかの誰かさんに言われた
 そんな言葉、俺には気休め程度にしか聞こえない . . .
 だって、凡人の限界なんて高が知れてる、結局は才能との埋まらない差を痛感してどんどん墮していく
 ならば、凡人には凡人なりのやり方がある
 一々正々堂々真っ正面からぶつかり合つ必要は無いと思つなあ . . .

重 side

どうも、元氣にしていましたか？

毎度の如く、しつこいくらいお馴染みの神無月重です
 え？模擬戦の結果はどうなつたつて？
 今闘つてんだよ、気が散るだろうが
 まあ、皆さんが予想する通り絶賛戦闘中です
 「はつはつは、どうした？タリサ君
 大口叩いた割には、僕一発も当たつてないんですけど？」
 «ツ！うるせえ！」

「無駄無駄、全てお見通しだ」

『「」、この変態野郎が . . .』

「吠えろ吠えろ、キヤンキヤン吠えろ

駄犬幼女め」

『 . . . 殺す』

そう、何と俺は一発も被弾していないのだ

ふつ、どうだ俺の操縦テクは . . . ぶっちゃけて言います、それ程余裕無いです

回避に全神経やら細胞やらを総動員してるんだわこれが

攻撃してゐる余裕なんてねーよ

下手にしたら距離詰められてあほーん！だ

その証拠に、俺の網膜ウインドウの残弾数は常にレギュラー満タンとにかく距離を離すことによく専念中、そこ！チキンプレイとか言うな『どこ行きやがった・・・』

『ラアーさつさと出でこい！』

どうやら、物陰に隠れた俺を見つけ出せないようだな、しめしめこの言うときにラプターチャンのステルス能力は便利だな

そつと、物陰から状況を伺う

ヴァレリオとステラは共に向こうで熱いランデブーの真っ最中だ、邪魔しちゃ俺が巻き添えを喰う

あつちはあつちで勝手にやらせるとして、俺はこの幼女を叩きのめすぜ！そこ！大人げないとか言つな

（そーっとだ、そーっと、そーっと、突撃砲を構えて・・・今だ）
ほれほれ、こっちだ駄犬幼女！

『なに！？いつの間にっ！くそお！』

「Good night！」

あとはこのトリガーや引く、だけ拭くだけ俺の勝利は確実だ

ダン！ベしゃ

『あ

「あん？」

『Aチーム、リーダー機撃墜、状況終了』

「・・・ええ、何それ」

背後を見ると、敵チームのステラが銃を構えていた・・・つまり、

狙撃である

「納得できねえよ……ちくしょうめ」

やつてくれたな、あのボインちゃんめ

よく見ると、何故かもうヴァレリオ落ちてるし

戦闘中周りが見えなくなるのは俺の悪いクセだつたな……反省反省

『あちやー、やられちゃいましたか大尉』

「男性チームの完全敗北だ、女の壁は高えな」

しかも、たつた1人にやられるつて……俺多分部屋に一週間ぐら
いひきこもりたい気分だわ

『……取り敢ず』

「……戻るか」

とぼとぼ歩く戦術機の哀愁漂つ背中はさきと絵になつてゐはず……

・誰が得すんだよ

-----しばりくお待つトモ-----

制服に着替えて先程の部屋に戻ると……

「ははっ！何がBlood Eaterだよ、たいしたことねえ
じやん！」

「全くピーピーつむさい幼女だなー、目の前にいるのは人生の先輩
だよ？」

もつと大切に敬いなさい……つて言つか、お前俺にダメージす

ら』えられずに終つたじやん』

「う……その前にずっと逃げてたじやねえか！」

「あれは逃げてねえ！戦法だ！」

「名付けてチキン戦法つてか！？」

「チキンつて言つな！」

「じゃあ、何て言つんだよ」

「……引き撃ちつていうんだよ」

「撃つてねえじやん、ずっと逃げ続けてたじやん」

「チキンって言うな！」

「言つてねえよ！」

どうやら、この幼女とは決定的に何かが合わないようだ

水と油、月とすっぽんみたいな……もちろん俺が月だけだな？

イブラヒム side

「やれやれ、まったく……」

どうやら、あの人は昔から何も変わっていないらしい

恐らく”進歩”と言つ言葉を、何処かの前線に置き忘れてきてしまつたようだ

やる気のない怠そうな格好、ダラダラとだらけた行動、死人のような瞳

彼こそが知る人ぞ知るBlood Eater（血を啜る者）と初めて聞けば、10人中9人は腰を抜かすだろう

既に彼を救世主扱いしている国もあるし、出鱈目の英雄譚も語り継がれている

しかし、彼はそんな大層な者ではない

寧ろ英雄とは程遠く、敢えて言つなら”生き汚い”と言えばいいだろ？

彼はただ生きることに執着しながら戦い、その結果周りが助かっているだけ……それだけである

祖国を守るためにではなく、生きるために戦っている男……それが神無月重だ

それに、Bloody Eaterの名は一部の人間の間では良くない意味で通つていることもある

私はその一端を垣間見たことがあるが・・・まあ、今となつては過ぎたことだ

しかし、衛士としての腕は誰もが保証できる

性格は別として、長年あらゆる国家の前線に立つてBETAと戦つてきた豊富な経験が今の彼の実績を物語つている

その点で言えば最古参の衛士の中で、彼は違つ型の天才だ

重 side

「ぶえっくしょいーー！」

「うわ！汚ねえな！」

「グズ・・・悪い悪い」

「真後ろでクシヤミすんなー！」

「別にいーじやん、細けえこと気にすんなよ

「なんだあ？大尉、風邪か？」

「それはねえだろ、コイツ馬鹿だから」

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは、お前は自分の頭の軽さを省みてから言え」

「んだと？クラアー！」

ただ今、部屋の中で4人バイブル椅子に座りながら雑談中

俺のクシャミから始まつた会話は早くもヒートアップしてきている

「はあ、そもそもBody Eaterって言つもんだからど

んなスゲー奴かと思えば・・・」

「・・・」

「こなんおつさかよ・・・」

「とつー。」

ズビシ！

「何すんだコラアー！」
「お兄さんだつていつてんだろー」「コラアー！」
「まだ言つてんのー？ムリがあるつてー」
「ほう、どこら辺が？具体的に10口言つてみる」
「まずヒゲー！そのニヒルな笑い口！年齢！つて言つか殆ど全部！」
「具体的について言つただろうがサル女め、それではおっさんと言つには程遠いなあ」
「ダメだコイツ、色んな意味で手遅れだ」
「んだと？こんちきしじつ、じゃあ、お前は俺のことなどんな風に想像してたんだよ」
「そりゃあ···」
「···」
「···」
「···ダメだ、格好良すぎてアンタと比べると可哀想」
「うるさいよ！？世の中なあ、そorschう上手くいくことなんてこれっぽっちもねえんだよ！分かつたか！」
「でも、確かに私の想像とも大分違つていたわね···」
「！？」
「ステラもそう思つだろ？VGは？」
「まあ、ぶっちゃけ俺も」
「何がぶっちゃけだよ、何だ？この戦力差は明らかに可笑しいだろ何？イジメ？止めようぜそういうの、今時流行んねえよ
全人類協力し合つていろいろ最中に、君たちみたいのがいるからいけないと俺は思うんだけど

そこんどこどうなの？ん？君たひ

「何語り出してんだよ」

「俺だつてなあ、好きで呼ばれてるワケじゃねえんだよ
何？B100dy Eater？恥ずかしいわ！ボケ！」

「自虐にしか聞こえねえから、止めろおっさん」

「おっさんじやねえ！」

「もうこうとこがアタシ達の想像と違つんだよ
「じゃあ、どうしろと！？」

「風格出せー風格！その霸氣の籠もつてない瞳止めろ
「歳を経る毎に元気が無くなつてくれんだよ」

「．．．おっさん認めたな？」

「は．．．しまつたあああああ！」

「くそ！幼女め、はめやがつたな！？」

「今の完全な自爆だろ」

「つづ、もう立ち直れねえ」

「．．．ああ、今までのイメージが崩壊していくわ」

「確かにな．．．でも、こっちの方が気楽で良いんじやねえの？
俺も最初はどんな厳つい化物かと思ったが、案外俺達みたいに普通の人間らしいな

「そうね、どこも特別なところがない非凡ではなく、平凡
それでいて過去を重複するわけでも、斬るわけでもない．．．
多分彼にとってB100dy Eaterとは、経験から勝手に生まれた產物に過ぎないのかも知れない．．．
「だからあんなに執着が無いのも頷けるな、間違つても英雄の器じ
やねえけど．．．」

「ええ、戦場を誰よりも知る普通の人間．．．私たち衛士にとつて
の救世主かしらね」

「違いねえ、最高の上官だ」

「ふふ、もうね」

「うやら向こうはなに盛り上がつているようだが、生憎と俺は

そんな大層な人間じやない

どこまでも自分の事しか考えていない汚い人間だ
俺の辿つてきた道にはB E T A の血だけじゃなく、嘗て共に戦つて
きた仲間の血も染みついている . . .
中には、助けられると分かつていて見殺しにした仲間もいる . . .
それでも俺は自分が可愛い、自分は誰よりも優先されるべき人間だ
と思っている自分がいる

だからな、そんな俺を信用するのは余りオススメしないぜ?

その先に待つているのは、不幸と死だけだ . . .

「 - - - - い、おー! おー! もん! 聞いてんのかよ」

「ツーな、なんだ」

「どうしたんだよ、そんな黙りこくつて」

「な、何でもない」

「 . . . ?」

「スマン、ちょっと外に行つてくる . . .」

「お、おー!」

少し . . . 風に当たつてくるか

良い気分転換になるだろう . . . 多分

しづち

1番、2番、3番

1位、2位、3位

少尉、中佐、大将

みんな1つの命なのに、何で人間は位を付けたがるのかねえ . . .
人間らしいと言えば人間らしいが、なんか納得できん

重 side

「あ . . . 憂鬱だ」

どうも、人間失格、駄目男の神無月重です
ただ今、メチャクチャブルーな気持ちです

「どうも”あの目”は慣れねえな . . .」

一種のトラウマみたいなもんだ、あの目は . . .

何十回、何百回とあの眼差しを向けられてきた

いつからだろうか？Bloody Eaterと呼ばれるようにな
つたのは . . . 多分あの頃からだろう

いつしか自分に向けられる”あの眼差し”が重圧となつてのし掛か
つていた

それを向けられれば向けられるほど現実というモノを痛感した

「あ . . . 何でこんな風になつちましたんだか」

気づけば、もう引き返せない所まで来てしまった

戦場を経る毎に、Bloody Eaterの名が知れ渡る毎に、

俺は自分が汚い人間だと思い知られた

人々の声援がこれ以上ないほどの罵倒や侮蔑に聞こえてくる

それが嫌で嫌で . . . 俺はいつも逃げた

逃げて、逃げて、逃げ出して……前線に留まつてはまた逃げて、
その繰り返し

いつの間にか、自分という人間が他人に知れ渡るのですら恐ろしく
感じていた

だからずつと逃げていた……

ま、その果てに祖国に戻るとは……これも何かの因果かねえ

「どうせなら、口口と死にたかったものだが……」

しかし、その機会は多々あれど考えているのと実行してみると
はまるで違う

別に死ぬのは恐くない……恐いけど

俺はそれ以上に死ぬ前に来る”痛み”が恐いんだな

これが溜まらなく恐ろしい

どうせなら平和の元、自分の惚れた女の膝の上で死にたいもんだ
だが、衛士という鎖で繋がれている以上、無理な高望みだ

これぞ正しく高嶺の花……つてね

……いやに今日は冴えるじゃねえか、俺

いつもの思考が不気味なくらい取り戻せねえ

「まったくどうするかなあ」

気がつけばワケわかんねえ所まで来ちゃってるし……何処だよ此処

「はあ、ホントにどうすつかなあ……」

何で巖谷の野郎はこんな所に送りつけたんだか

そもそも、何の為に俺はここにいんだ？

結構楽かと思つたが……どうやら簡単な仕事じゃないな

「はあ……本当に憂鬱だ」

空はもう夕暮れだ、時間つて言つのは人の事情を知らないでサクサ
ク進んでいく

憎たらしつたらありやしない

人間の最大の敵は時間だと思うよ、俺は

「……戻るか、いつまでもこんなじや、あいつらにも悪い」

歩みを反転させ、墓地方面へ向かおうとする……すると、あるモ

ノが目に入った

「あん？」

「！」

それは . . .

「（幼女 . . . だと？）」

まだよ、また幼女だよ

銀色の髪をした、つるぺったん社に似た幼女だよ

なに？ また俺ブ厚い本の角で殴られなきゃいかんの？

. . . これもう呪われてんじゃねえの？

「 . . . 」

「 . . . 」

じっと見られている俺

何なの？ この子、残念ながら俺口リコンじやないからね

これだけはハツキリ言つとくよ？ 俺は口リコンじやないからね？

その趣味の連中は狂喜乱舞しそうだけどな、生憎と俺はそんな恐

ろしい奴等とは違うぜ

まあ、将来が楽しみではあるが . . . 俺、口リコンじやないからね

? ホントだよ？

勘違いしないでね？ 俺本当にロリコンじやないからね？

ここテ스트出るよ、しっかりメモするなり、蛍光ペンで線引つ張る
なり各自の覚えやすい方法で記憶しなさい . . . ”神無月重、39
歳、断じてロリコンではない！”

よし、良かつたなあ、これが正解すれば赤点は免れるぞー

解答ミスつた奴は後で職員室来なさい

先生が特別指導してあげるから、覚悟しておくれよー

? ? ? side

なんだろ?「このひとは……ふつりじゃない

」「じいじはきずだらけなの、へいきなかおをしてる
」「じいじがちだらけなのに、ずっとあるきつづけてる

」「じいじがよわいのに、たたかいつづけてる
もついつこわれてもおかしくない」「じいじでさうじきゅうひいてる

いたくないのかな?

かなしくないのかな?
さびしくないのかな?

「 . . . 」

「 . . . えつと、何?何か用?」

「 . . . いたくない?」

「あ?」

「いたくないの?」

「痛えよ、主にお嬢ちゃんの視線がな
」「そうじやなくて . . . 」「じいじ

「心お?ワケ分かんない」と言つてないで、お家帰りなさい
まじり、この黒糖飴やるから

「 . . . 」

「あの、まだなんかあんの?

お兄さん見せ物じやねえけど . . . 」

「どうして、へいきなの?」

「 . . . だから何が」

「じいじ

「あんまりからかつてると、お兄さん怒るぞー」

「あなたのこじいじはきずだらけ . . . いたくないの?」

「傷?つば付けて直すから心配ねーよ」

「そこはかとなくばかにしてるね」

「 . . . はあ、良いかあ?お嬢ちゃんよ

耳の穴かつぽじつてよーく聞け

「？」

「時と場合によつちやあ、例えどんなに傷ついてもどうもな
いことがある

そんな時に一々”痛い”だの”助けてー”だの叫んだとして、結
局は無駄な足搔きつてヤツだ

そんな事に労力を費やすより、腕がもげよーが、足が千切れよー
が、歯あ食い縛つて自分で何とかするしかないのぞ

「こわくないの？」

「氣合いで何とかなる」

「さびしくないの？」

「…寂しいつちや寂しいが、俺は色々裏切ってきた男だからな
独りは慣れてる」

「…」

「ちょっと、小難しかつたか…」

まつ、世の中ウマイ事ばっかりじゃないつて」とか
お嬢ちゃんも大きくなりや分かるよ

「なんでわらつていられるの？」

「こんなご時世だ、メソメソ泣いてちゃみつともねえだらうが
「みつともねえ？」

「そーそ、”みつともねえ”だわかつたか？」

「うん、わかつた」

「よーし、じゃお子様は帰る時間だ

その黒糖飴持つて帰りなさい」

「…」

「ま、まだ何か？」

「なまえ…？」

「あ？」

「なまえ、なんていうの？」

「人に名前聞くときは自分から名乗れよ、ばーか

「む～、ばかじゃないもん！」

「あ、スマンスマン、つい何時もの調子で喋っちゃったで？名前なんだっけ？ああ、エリザベス？良い名前だね」

「せんせんちがうよー? まだなまえこいつでないよー?」

「え、面倒臭いからそれで良いじゃん、エリザベス良いじゃん、立

派じやんエリザベス

「なんでそこまでエリザベスにこだわるのー?」

「しょうがないなあ、聞いてやつから書いてみ? ん? アルテイシア」

「つひじみてつかれるね・・・」

「井川一お前はまだつゝじみの鱗片すら触れていないぞー。」

「…………ねえ、ほんだいにもどかしつづく

「おっと、そうだったな、ミステリア」

「ボケのほうわじょうたいつ

」
ねえか、
せじひ!川

17

「あ？」

わたしのなまえ

卷之三

「田代さん、おはようございます。」

「さつーいづーーんばーーらーべー」

「はは、『元談』だいしたと『元』たまふ。」

はは「元話」

「
・・・
のうへ
た

「 もじや、俺の名前だつたば

俺の名前は神無用しづるーイ!! あ?

「クリスカ」

重 side

出鼻挫かれたよ

結構恥ずかしいよ

どうしてくれんの?コレ、高くつくよ?ん~?コレ

「クリスカ . . .」

「 . . . 誰?」

「貴様 . . . イーーアから離れろ!」

ジャキ!

「ええ~」

あの手に持つてゐる黒光りする物体は何ですか?

俺の予想が正しければ、"拳銃"という武器ですな

ハンドガン、ピストル、チャカ力 . . . 付ける名は多々あれど、本来の目的は生き物を殺す道具である

それを向けられてると云つことは . . .

「(え? なに?まさかの絶体絶命?)」

何だよ、この状況

何で幼女が絡むと流血沙汰になんだよ

絶対におかしいだろ . . .

「勘弁してくれよ、まったく」

俺は反射的に両手を挙げ、頭の後ろに付けてイーーアから離れる

女に拳銃向けられてこんな体勢になるなんて、アイツの時以来だな

・まあ、あの女は発砲してきたが

「クリスカ！ちがうの！」

「イーニア、こっちに来なさい」

「クリスカ！やめて！」

おお、頑張れイーニア

俺の命運はお前が握ってるぞ

失敗したら末代まで呪う

さあ！俺の運命や如何に！？

「（取り敢ず、タバコ吸おう）」

イーニアとクリスカなる人物が話し合っている隙に、ポケットに手を忍ばせる

「（おお、あつたあつた）」

その箱から一本取り出し、口にくわえてライターを取り出す

・・・何か普通に出来たな、こりゃいけんじゃね？

シユボ！・ダン！

「・・・」

「貴様！動くな！」

撃つたよ、撃つてきたよ、ライターが粉々に砕け散ったよ

「どうすんだよ、これ……意外と高かつたんだぞ、コレ！？」

「まあまあ、もちつけ……落ち着けよ、こん畜生噛んだじゃねえかよ、どうしてくれんだよ、恥ずかしいじやねえかよ、この野郎」「ふざけてるのか？」

「そつちこそふざけんなよ、人の名前遮つた挙げ句になんちゅう物突き付けてんだ？」「う」

「どうやら、自分の立場を理解していな」「うだな」

「はっ！今更そんなもん向けられてビビるか

いちどらなあ、その何百倍テカイ銃を生身で突き付けられたこともあんだ

それに比べりや、可愛いオモチャだね」

「ほう？では何の問題も無いだろ？？」

ありすぎだよ馬鹿野郎

そう言いかけて、瞬時に飲み込む

生身で喰らつたら命に関わる代物である以上、拳銃も戦術機の突撃砲も変わらない

「で、どうすんの？」

大体そつちの意図が読めないんだけど？」

「イーニア、良い子だからこっちに来て」

「……」

なるほど……

この子を捜してきたのか？

「苦労なこつたな、まつ、原因が分かれば解決は難しくない

「イーニア……お別れの時間だ」

「ツー！」

「あのお姉ちゃんの言つことちゃんと聞けよ、じゃなきや、俺の命が危ねえ」

「……」「うん」

「よーし、良い子だ」

イーニア銃を向けている彼女の元に歩き出す

「あ

「なんだ」

「なまえ

「はあ、重だ、しつかり覚えとけ」「うん、じゃあね、シゲル」

「．．．ああ、またな」

そして、2人はそのまま向こうへ行ってしまった
取り残されたのは、当然俺一人

「はあ．．．疲れた」

どうやら、前途多難は俺の人生に憑きものらしい

「（先が思いやられるぜ、まったく）」

そう思いながら、基地へと足を進めた

はっち

”極めるな、常に進化しろ”
これが最強への最短の道のりさ

重 side

どーも、何？いい加減その挨拶は聞き飽きたあ？
ハイハイ、どうもスイマセンね

これしか思いつかねえんだよ、こんチクショウ

昨日のシリアスマードから一転、いつも通りの重お兄さんですよ
ただ今シャワールームへ向かっています

この身に溜まつた色々と汚いものを洗い流すため、タオル片手に廊下を進軍中

「 . . .」

さて、更衣室に突入 . . . ミッション開始だ！

「ん？」

しかし、いざ服を脱いだとすると、あるものが目に入った

「 . . . なーにやつてんだ？お前」「

「 . . . あ、あ、大尉ですか」

男の神聖な領域をタオル一枚という、RPGの初期装備よろしくの紙装甲で覆い、雑巾のようになりはてた物体 . . .
ヴァレリオ・ジアコーザが捨てられていた

「ほら、この黒糖飴やるから、これ舐めて元気出せ、な？」
「なんすか？その地味な気遣い」

「失礼なヤツだなー、気遣いがあるだけありがたいと思え

男の全裸なんぞ晒して誰が得するんだ？

田の保護にもなんねーぞ、本当はスルーしたいんだぞ、どうすん
だよ、今更絡んだことに後悔してきたぞコノヤロー」

「そ、そこまで言わなくとも . . .」

「で、なんかあつたの？」

「 . . . いや、女の壁の高さを改めて実感したとこです
「今更かよ . . . で、サイズは幾つあつた？」

あ、タリサは聞かなくていいや、幼女なんぞ興味ねえ

「 . . . (あとで言つといひ)」

「で?どーなんだよ」

「あれは . . .」

「 . . .」

「 . . . 核兵器だ！ . . .」

「なん . . . だと . . .」

「俺も拝みたかつたあああ！ . . .」

「ふ、あれを見逃したとあらば、男にあらず . . . ですぜ、大尉」

「くそおおお————！」

「はつはつはつ！」

「」の俺神無月重、三十余年生きてきたが . . . あれ程立派なモン
は見たことねーんだよおー」

「でしょでしょ . . . それでねえ「2人とも?」」

「「ん?」」

「何の話をしてるのかしら?」

「ほ、ほら、あれだよあれ . . . な?」

「(ええ . . . 僕に振るんですか?) あ、あれですよねえ

「あれとは?」

「(ビーすんだよーなんか怒つてるぞ、なんか指ボキボキ鳴らし始
めたぞつー)」

「(元はと言えば大尉が . . .)」

「(あ?そつやつて俺のせいにすんのかつー?核兵器とか言つたの

はお前だらうがつ！？）

「（さつきまで拝みたかつたとか言つてたの誰！？）」

「大尉」

「（ゲ！？俺かよ！）な、なんでしゅか？」

「（噛んじまつたよ、大尉緊張のあまり噛んじまつたよ）」

「かなり盛り上がつていたようですが・・・どのようなお話だったか教えて下さる？」

核兵器とか、立派なモンとか聞こえたのですが？何が立派なのですか？」

「そ、そんなこと言つてねえよ・・・幻聴だよ、きつと、疲れてるんだよ、きつと、シャワールームの妖精だよ、絶対」

「へえ、シャワールームの妖精ねえ・・・」

「そうだよ、此処出るらしいよ？そういうの」

「じゃ、今度出たらきつちりと”退治”しないといけないわね、そんな悪い妖精さんは・・・」

「そ、そうだね・・・はは、ははは」

「クスクス・・・それで、大尉は次の任務知つていますか？」

「あ？次の任務？」

「その様子だと、聞いていなかつたようね・・・」

「馬鹿にすんなよ、ほら、あれだろ？」

戦術機でオリーーブの旗掲げて西と東が仲良く飛ぶんだろう？」

「（タリサと思考回路がまるで一緒ね）・・・そんな感じで大体合つてるわ」

「（合つてねえよ、重要な部分が最後尾にしかねえよ）」「で、俺はほら、楽しい楽しい撮影会の仲間入りだろ？」

余裕だね、余裕」

「・・・（大丈夫かしら）」

「ほらほら、これから身を清めるんだから、あつち行きなさい最初に言つたでしょ？俺つてシャイなの」

「そうね、失礼したわ

「じゃ、また後でね」

「はいはい、ヨロシクね～」

女神のような笑みを最後に更衣室から出て行くステラ
まったく、女ってヤツは、裏で何考てるかわからんから恐わいん
だよなあ . . .

「さて、俺は一流ししようかね」

「えつくしょい！」

「お前は風邪引かないうちに服着ろよ」

「了」解

さあ、いざ突入！

・・・俺の背中の相棒達も喜んでくれるかねえ

・・・・・しばりくお待ち下さこ・・・・・

・・・ふう、気持ちよかつた

何見てんだよ、さつきも言つただろうが

男の裸なんぞ誰が得すんだよ、誰も得しねえよ、一部の人間以外はな
さて、サッパリした事だし、件の任務の挨拶に行きますか . . .

・・・・・しばりくお待ち下さこ・・・・・

「初めまして、お目に掛かれて光榮ですよ

「・・・どうも？」

「誰だ？」「こいつ . . .

「あなたの噂は耳にしています」

「はあ . . .

「フツフツフ、Bloody Eaterの名は遠く本国まで……
「マッハパンチ！」

メゴス……

顔面にクリーンヒット！

すげえ、綺麗に決まったよ

「ゴフツ！な、何をする！？」

「ああ、ごめんごめん、手が滑った」

「嘔吐けえええ！！今明らかに”マッハパンチ”とか言つただろうが！？」

「ま、ま、落ちつけ、ほら、黒糖飴やるから」

「こ、ら、ね、え、よ、！子供か！」

「だから『めんつて言つてんじやん、誰にでも間違いはあるって』だから今のはワザとだろ！？」

「そんな酷いこと俺がやると思つてんの？そりや、差別だぜ、偏見だぜ、そんなんじゃ人間の片隅にも置けねえよ」

「じゃ、マッハパンチって何？メゴスって何？何で鼻血出でんの！？」

？

「そんな事俺が知るかよ、アレだよ、”マンハッタンパンジー

”って言おうとしたんだよ

「何だそれ！？無理あるだろ！」

「ガタガタうるせえヤツだなあ……さつさと今回の任務の説明しろよ、5分押してるよ5分」「最低だよ、最低な男だよこの人、自分のやつたこと無かつた事にする気だ」

「わかつたわかつた悪かつたって、氣をつけるよ、氣が向いたら」

「……ゴホン、では、今回の任務の説明をします

今回は広報任務として、西側から一機、東側から一機、合計二機

でアラスカ上空を飛行します

言い換えるなら団結の証、BETAに屈せず、互いが協力し合つ

という重要な意味を孕んでいます

「しつもーん

「……何ですか？」

「俺は何をすればいいわけ？」

「あなたには、広報任務の護衛……即ち、映像を取つて、聞、

もし、有事の事があれば、それを鎮圧して貰います」

「へえ……ある意味、一つの大國の友好を象徴する任務なのに、隨分物騒だな……まるで」

「……」

「初から何かが起きることが前提されてるみたいだ……」

「……それは、私の知ることではありません」

「ふーん」

「他に質問は？」

「……」

「では、もうすぐ一機が合流します
持ち場について下さい」

さーて、臭くなってきたぞ

何が起こるのかねえ……

その頃、別の場所で……

パン！と言う甲高い音が鳴り響く

「何すんだコラア！！」

「私たちは任務遂行のためにここに来ている

貴様らにはこのような馴れ合いも含まれているのか？

「何だと？・・・？」

「我々が此処にいる理由をはき違えないことだ

一度と私たちに近寄るな」

不穏な波紋は次第に広がっていくのであった

再び戻つて広報任務撮影組

既に、重は自らの愛機に搭乗している・
いや、彼にとつて愛機では無いのかも知れない
彼は様々な戦術機を乗りこなしてきた

戦場が変わる度に、雇われる国が変わる度に、自分の半身たる戦術機
機を変えざるを得なかつたのだ

第1世代から第3世代まで・・・大凡この男が乗つていない戦術機
など無いのだろうか？

今はN222YFに収まつてゐるが、今後はどうなるか分からない
彼にとつて見れば、この戦術機は傷つけると後で何言われるか分か
つたものではないため、早々乗り換えたといいうのが本心である
「しかし、平和だね」

平行して飛ぶ二機を見ながら呟く

前では一生懸命かどうかは知らないが、二機を撮影している戦術機
の後をオートパイロットに任せて自分は「ツクピットで窓いでいる・
・・かと思いきや、いきなり目を瞑り、睡眠を取り始めた
完全に他人事、やる気の欠片もない行動は、彼が軍人であることが
根本的に間違つていることを感じさせられる
だが、彼は知らないだろう

これから起きたであろう物事を・・・

彼の言うところの厄介事が不意に牙をむいた

「 . . . 」

「 大尉！」

「 おわっ！びびった . . . 何？何か用？」

「 何か用？じゃ無いですよ！緊急事態です！」

「 何があつたの？」

「 あなたという人は . . . 良いですか？状況を説明しますよ

A C T V アクティブ・イルグルが チェルミナートルを ロックしました

「（あんのクソチビ何やつてんの？馬鹿だろアイツ馬鹿だろ） . . . で、それだけ？」

「 その後ですよ、そこから A C T V と チェルミナートルは コースを大幅にずれて 高機動空中戦闘を 展開しています」

「 ほつとけよ、 気の済むまでやらせとけ」

「 何を馬鹿なことを！死人が出てからでは遅いんですよ！…それを防ぐためにあなたがいるんです！」

「 はあ、俺の任務は撮影係のお守り、そんな事一言も聞いてねえよ「有事の際には . . . と申したはずです！聞いていなかつたのはあなたでしょう！？」

「 C P から指示出せば良いじゃん」

「 それで収まっているならとっくに終っています！」

「 はいはい、で？俺に何して欲しいわけ？」

「 一機に戦闘を中止させるように呼びかけてください」

「 それだけ？それで止まるとは思えないなあ . . . 」

「 とにかくやるだけやって下さー、追つて指示は此方から出します」

「（何を偉そうに、言つだけは気楽で良いな）了解、一機の現在位置を送つて」

「 了解、座標を送ります」

彼は直ぐさまオートパイロットを解除

ステータスチェックを行い、N 2 2 Y F を 戦闘モードに 移行させる

その数秒後に、一機の座標データが送られてきた

「 おいおい、随分と派手にやつてるなあ

と眩しつつも、ブースト全開

「（まつ、言うだけ言ってバツクれるか）」

面倒臭いの大嫌い、樂して生きたい

無氣力怠慢駄目人間が戦闘に介入 . . .

さて、誰が予想できようか？

彼が戦う姿を . . .

”Bloody Eater（血を啜る者）”の本当の意味を . . .

耐える、歯を食いしばれ . . .

生き残れ、何をしてでも . . .

他に感傷を移すな、失つても良いように . . .

最低で肩みたいな矜持だが、案外気楽なもんだ
オススメはしないがね . . .

重 side

”馬鹿は死ななきや治らない . . .”といつ言葉があるように、あのお馬鹿さんも一遍死の恐怖とやらを味わえば、少しほマシになるのだろうか？

「そこの戦術機2機、聞こえてつか？」

『つるせえ！首突つ込むな！』

「お前ら一体時速km/mで鬼ごっこやつてんだよ

幼少の気持ちを忘れないのは結構だが、お前既に幼女だからね？

そろそろ大人の階段上ろうぜ？勇氣ある一歩踏み出せよ

『どこをどう見たら鬼ごっこになるんだよ！お前バカだろ！見て分かんねえのか？バアカ！』

「分かんねえよ、お前がバカつっここと以外はな」

『んだとコラ！お前後でぶつ飛ばす！』

『CPさんよお、聞こえてる？』

駄目だ、説得に失敗したわ、あれ程サルが人間の言葉を理解するのは無理って言つただろう

と、言つわけで今から帰投するわ』

『何言つてんですか！あなたは！もう少し粘つてくださいよ。』

「えー無理だぜ」こりや、だつてサルだもん

『なんだと、この腐敗人間！！』

『新編和漢書』

あなたは眞面目にやっているんでなか

ପ୍ରକାଶକ ନାମ : -

元を正せば、サル女！ テメエが面倒起しちゃなきせ
平和に終つてた
んだよ！

? 戦いたいなら単身ハイヴに突っ込んでこいや！！

『 もうどうでもいい。アホウジンヒロキヤジリ

「今の一言でお兄さん怒つたぞ、後でどうなつてもしらねえぞ、謝

んなう今のはちだぞ？

『誰が謝るか、バーカ！』

『いいかげんにしろ!!――!!』

「ほら見ろ、広報監察官の人怒つたじやねえか・・・うて、通信切

三 章 一

「うーうー、うーうー」

おしい言いがかりは止せ

言つとくけど、俺そこまで立派な人間じゃないからね、その恥ず

かしい名前も全部周りが勝手に付けたものだからね」

۷

から帰投します

『待ちたまえ』

「ん? まだなんかあんの? (· · · なーんか聞いたことあるような

声だな)

『全く、君は相変わらずだね』

「...・まさか」

『久しぶりだね、アーモンド君、いや、それは偽名だつたな……
そうだらう、神無月重君?』

「ハルトウイイイイイック!…』

『……私の名前をその大声で呼ぶのは止めろと言った筈だが?』

「気にすんな、ノリだつてノリ……つて、何で此処にいんの?』

『それは私がこの計画の最高責任者だからだよ』

「ふーん、で、最高責任者が一兵士に何か用? 嫌な予感しかしねえ
んだけど」

『重君、どんな手を使つても良い、あの2人を止めたまえ……こ
れは命令だ』

「は? だから無理つて言つてんじやん』

『出来る出来ないではない、命令だと言つた筈だ
それに、攻撃を許可するとまで言つたのだぞ?』

『するいぞ! ? 職権乱用だ! 鬼だ! 悪魔だ!』

『良いから早くしたまえ』

「……クソが、後で覚えてろよ』

『フツフツフ……楽しみにしてこるよ』

そこで通信が切れる

「……(とは言つたものの)」「

どうしろって言つの?

もう大分遠くまで飛んで行つちゃつたけど……

それにもしても、まさかハルトウイイックまでいるとはな……ビック

りしたわ、昔を思い出すぜ

「……』

おつとと……思考に耽る前に、あの一機を追いかけるか

「その頃、別の部屋で . . .

「やれやれ、全く . . . フツ、あの男はいつまでたつても変わらん
な」

「 . . . 大佐は神無月大尉とお知り合いで?」

「まあな、あの男には色々と世話になつたものだ . . . 世話しても
やつたがな」

「 . . . あの」

「何かね?」

「大佐は、彼を見てどう思ひますか?」

「ふむ、質問の真意が分からんな」

「そ、そつですか . . . 何でもありません、忘れてください」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 . . . 」

「共に戦つてきた”戦友”だ、これだけはハッキリ言える」

「そう . . . ですか」

「何か含むところがあるのかね?」

「いえ、特にありません」

「ふむ、そうか(そう言えれば、重君が何故日本ではなく各地を転々
としていたか分からんな . . . まあ、あの男のことだ、余り深い意
味は無いと思うが . . .)」

「 . . . (何故、彼は国外逃亡を?叔父様はただ単に死ぬのが恐い
からと言つてはいたけど、何故態々国を出てまで恐がつてはいる戦場に
出でているのか分からない

そして、どうして . . . 恨まれると、憎まれると分かつていて國

に戻ってきたのか……分からぬ、下手をすれば殺されてしまうと言つのに……」

色んなところで彼に対する思考が入り乱れる
彼の行動は捉え方によつて無意味にも意味深にもとられることが多いある、非常に厄介な質なのだ
しかし、彼の行動原理とは単純に考えれば納得してしまうほど簡単なのだ

恐いから逃げる……

しかし後になつて逃げた事に後悔し、その苦惱に抗つために戦う……

そして恐くなつてからまた逃げて……また後悔しては戦う……
時たま故郷が恋しくなつて、碌なことにならないと分かつていながらも、生まれた場所に帰る……

彼が、そんな臆病でどうしようもない性格であると理解できる人間ならば、容易に納得いつてしまつただが……世の中それ程甘くはないのである

チキンでヘタレな彼にはキツイ「時世」であった

高速で三次元戦闘を繰り広げる一機

そして、その後を追つようの一機の戦術機が接近していた

重 side

「そこの一機止まれ～、止まらないと撃つぞ～」

駄目だ、一向に止まる様子がねえ……

どうするかな～

攻撃許可まで下りてるしな～

やらないと、何されるか分かつたもんじゃねえ・・・

「サル女、聞こえてたら返事くれ」

『ツ！またお前かよ！すつこんでひー。』

「そうしたいのは山々なんだけどねえ・・・生憎一番偉いおっさんからお前らの戦闘を止めさせるとか言われてるのよ」

『知るか！そんなもん！』

「そんなもんだから、じつちとしても不本意なんだけど・・・攻撃許可まで下りてるからこはやるしかないんだよねえ」

『ツ！お前・・・』

「双方に警告する、5つ数える間に戦闘を停止しろ、さもなくば発砲する

これは脅しじゃない、正式に許可が下りている

それじゃ、言ってみよう

い～ち・・・ん？』

何だ？ チェルミナートルが急に停止したぞ？

そうかそうか、この俺の勇士に恐れおののいたか

何だよ、案外話が分かる・・・

「・・・って、何で今度は俺がロックオンされてんだ！！！」

何だよ！？こいつ、急に反転したかと思えば突撃砲構えながら「ひ

ち来たぞ、オイ

やつべ、これに傷つけたら怒られる・・・そんでもって、エスケープ！！

「ノオオオオオオオオ！！！ふざけんなああああああああああああああ！」

オイイ！？あの鬼さんは混紡の代わりに突撃砲握ってるぞー・ビツ二
う事だこの野郎！？

「待て待て待てちょっと待てえ！？」

『・・・』

「聞いてる？ちょっと聞いてる？無視すんなよオイ！」

『・・・』

「くそ、かくなる上は……ハルトウェイック！」

『何かな？』

『向こうに停止呼びかけて！それぐらい良いだろ？』

『ふむ、向こうのCPと繋げてみる、暫し待て……』

「オイイ！早くしてよ、犬じやねえんだ、待てはもう良いよ、何ならあれか？お手とか、おかわりとか、おちんちんとかすれば何とかなるのか？」

『それもそれで面白そうだ、良いだろ、やつてみたまえ』

「何でそうなるのー？馬鹿だろ、お前馬鹿だろ」

『何を言うか、その芸を見せればあつとも納得するかも知れん一つの策だぞ？やつてみる価値は大いにある』

「誰か！誰かこの馬鹿の頭を引っ張って！そしてさつとドライツに返してあげてー！」いつに最高責任者は無理だつてー。』

『フム、丁度向こうと繋がつたぞ、どうするかね』

『どうするかね……じゃねえよ、さつと停止を呼びかける』

『では、君が直接言ってみたらどうだね、今から繋げるぞ』

「オイイ！人の話を聞いてたか？停止を呼びかけろって言つてんのに何でそつなるの？やつぱり馬鹿だろ！？」

『よし、繋がつたぞ……頑張りました』

「あー？切るな！……くそ、あー聞こえますか？」

『聞こえている』

「おヤのやんちゃな子の暴走を止めてくれませんか？凄い迷惑なんですけど、近所迷惑びこじやないんですけど」

『すまないが此方でも応答を呼びかけているが、未だ返答がない』

「真剣にやつてねえからだよ、ちやんとやれよ、さつと止めろよ、何のためにお前らいるんだよ」

『お言葉ですが、元はと言えばそちらが我が国の戦術機に対して敵対行動をとつたからであつて……』

「今此処にいない人間の事掘り返してどうすんの？お前はガキか？そんなねちっこい事言つてる暇があつたらさつと止めろよ」

『……何だと?』

「おーおー、随分と沸点が低いねえお宅……将来ハゲるぞー」

『私を侮辱するのですか?』

「……お前、名前なんていつの?」

『これは失礼……イエージ・サンダークと申します、以後お見知りおきを』

「ふーん……じゃ、サンダークさんよアンタじゃ話にならないわ」

『まだいつのですか……ロゴフスキーのおっさんを出せ「せんせー!」ツ!?』

「いるんだろ? 絶対あのおっさんこいつ大きな計画に関わってる筈……多分」

『(何故同志ロゴフスキーの事を知っている…?) こいつは関係だ……(…何のことですかな?)』

「チ……まあいや、邪魔したな」

『……』

とうとう自分で何とかするしかなくなつたぞ、こりや……災難だな

『重君、今し方入った情報だ』

「今更なんだ、役立たず」

『酷い言われ様だね、そうそう、それは置いといて……現在、その空域に大型輸送機が飛行中だ

そのままのコースでは衝突する……回避せよ』

『お前は鬼か!? ああん!?』

『尚、輸送機に何かあつたら君に責任を取つて貰おう、そのつもりで……』

『は?』

『では、健闘を祈る』

『ちょ待て……切りやがつた』

『どうすんだよ、これ、とうとう引き下がれなくなつたぞ?』

向こうは未だ俺の後ろをストーカーの如くねちねち着いてきてるし、

今度は目の前に輸送機とは……

「ふざけんな！…やつてやるよ畜生！…」

バツチ来いや！伊達に修羅場を潜つてねえんだよ！

? ? ? s i d e

その頃、件の輸送機内部では2人の若い男性が搭乗していた
「ユウヤ、おまえさあ・・・いいかげん機嫌なおせつて」

「・・・」

「ガキじやねえんだからさあ・・・」口でフテ腐れたつて、しようと
がねえだろうよ」

片方の男性がもう片方の男性を窘めるが、そのもう片方の男性・・・
ユウヤはめんべくそそうに片眼を開き、睨み付ける
「ガキはどつちだよバアカ

こんな最果てに飛ばされたつて言ひにはしゃぎやがつて」

「なあユウヤよう、ユーロン基地つていつたら世界中のヒート衛
士が集められている作戦試験部隊の本拠地だろ？」

しかもオレ達の配属先は日本メーカーとの共同開発チームつてい
うじやねえか」

「・・・」

「そんなビックプロジェクトのテストパイロットに上層部直々に指
名されたんだ、ある意味榮転だぜ？」

何がそんなに気にいらねえんだよ」

「・・・何でオレなんだ？」

「あ？」

「よりによつて”日本”がらみのプロジェクトに・・・ビツしてオ

レガ . . .

「またそれかよ . . . 相変わらず日本のことになると熱くなるのな
「別に . . . 熱くなんかなつてねえよ」

「なんでそこまで日本を嫌いすんだよ
お前にだつて半分日本人の血が流れて . . . 「オレは . . . 「

そのとき、ゴツ！という音と共に機体が揺さぶられる
「何だよ . . .

再アプローチかあ？」

「違う . . .

「これは . . . 」

「あ、おい、どこ行くんだよ！」

ユウヤが急ぎ向かつた先 . . . それはパイロットルームであった
すでに操縦を担当している2人は異常に気づいていた

「後方から戦術機2機が高速で接近中！」

「このままだと衝突コースに . . . !」

「クソッ

演習区画はずっと向こうのはずだぞ！？

「何でこんな所を飛んでやがるんだ！！」

その時、男性のものと思われる低い声で通信が入る

『オラ！そこ退け！怪我すんぞ、オタンコナス共！』

「ダメだ、高度を上げるなッ！！そのまま滑走路に突っ込め！」

その時、彼らは見た、高速戦闘を開拓する一機の戦術機を
そして、あることに気づく

「ツー！（あれは . . . ラプターだと！？）おい、ヴィンセント！？」

「ああ . . . しかも、形状からしてただのラプターじゃないぞ、ありやあ . . .

あれは、国内でも数奇程度しか生産されなかつたN22YF、ラ

プターの試作2号機 . . . 幻の機体だ

「（一体、誰が乗つてやがるんだ . . . ！？）

彼らの疑問はアラスカに着いてから早々死きないものであつた

まあ、少なくともダメ人間が乗っているとは思わなかつただろう・・

重 side

未だ鬼ごっこに興じてゐる重であつたが、その顔は珍しく真剣そのものであつた

「おしおい、しー加洞にしなーとお冗さん怒るぞー。もう氣が済んだだろ? さつさとお家に帰れよ。」

「……」でも無視か……呼びかけてる自分が馬鹿らしくなつてしまつた

ようし、分かつた……もう怒つたぞ」

このラプターに積んであるエンジン・・・YF120エンジンはかなりの高出力を誇る

そんじやそこらの戦術機とは比べ物にならないほどの速度で飛行を可能にしたモンスター・マシンなのだ・・・まあ、その分ぶつ壊したらとんでもないことになるが・・・

まあ、今はそんなこと言つてゐる暇はないだらう

案の上、その速度に付いていこうと向こうも加速を始めた。そして、ここからは俺の戦いが始まる

「（チャンスは一回）」これで決めなけりやお終いさね

今から少し特製な機動をやる。……のは安いのだが、色々とせいいいんだわコレが

一つ、この機動は相当な加速が出ていなければ無理

2つ、チャンスは一回、二回目は警戒されて通用しない

3つ、体に悪い

主にこの二つの理由が起因している

まあ、三つ田が一番やりたくない理由なんだよね

卷之三

二マンチを繕昇ぐ入力

その信号を受けて、恐らくは、
跳躍装置が不可思議な方向を向いて
いる筈 . .

次の瞬間、視界が反転し、強力なGが肉体を襲う

骨が軋む、内臓が押しつぶされそうになる。・・それをやつとの事
ご堪え、反応し二限界から放の立位置を足る

「（こ）いつスゲーな、もう対応してやがる……」
「増え反転した視界から敵の位置を捉える

初見で対応して見せたのは「ヨイヅが初めてだぜ・・・でもなあ、対

応は出来ても攻略までは無理だったようだな
そう、特殊な機動とは 握返り である。 ビックリして驚いた

「お、物列が極重いには」
「官道」であるが、さうか、一司馬の

加速をつけて、ある決まった方向にブーストを吹かすことで、空中

で素早く1回転をする . . .

の機動に合わせて背後をとることが出来る

しかし1回で決めなければ、機動を悟られるし、2回目成功したと

そして、最大の理由が……しても通用するかはまだ別問題だ

「オ、オウエーハハハハハハハハ…（気持ち悪一出る一出わまつよ

卷之三

まず食べ過ぎてからこの機動を披露すると120%の確立でコック

ペシトが嘔吐という爆撃を受けた後の悲惨な現場になる

「でもこれで……後ろを取つたぜ」

『 』

「泣き言はきかねえぞ . . . それじゃ」

突撃砲をチャルミナートルへ向ける

「 G o o d n i g h t ! 」

『 ! ! 』

トリガーに力を入れる . . . ふ、ジ・エンドだ！

力チン！

「 . . . あれ？」

『 . . . ? 』

何だ？弾でねえぞ？詰めたか？

ん？ そういうや俺、大事なこと忘れていたような気がする . . .

「 . . . 」

『 . . . 』

「 . . . セーフティ解除すんの忘れてたアアアアアア－！－！」

『 . . . 』

何が G o o d n i g h t だよ、何がジ・エンドだよ、まだ昼間だ

よーまだ何も終わつてねえよ！で、言つか寧ろ俺が終わるわ！畜生

！！恥ずかしい！メッチャ恥ずかしい！

『 貴様は . . . 』

『 ん . . . ? 』

『 貴様はどこまで私たちをコケにすれば気が済むんだ . . . ！』

『 いや待て待て待て、本気でミスつたんだって！ゴメン、ホントに

「メン！だからちょっと待つて！！（女 . . . ?）」

『泣き言は . . . 聞かない！！』

やべー！今度は向こうが突撃砲構えてきたよ、バリバリ射程圏内なんんですけど、ハチの巣確定だぞこれ . . . 何か向こうの人メッチャ怒つてたし

『死ね！！』

「死ねって何！？マジで殺る気！？タンマ、Wait、ストップ！」

『双方聞こえるか？』ひらばはプロミネンス計画総責任者、クラウス・ハルトウイックだ

「何！？」

『 . . . !？』

『直ちに戦闘を中止せよ、これ以上攻撃行動を継続するといつなら、危険領域レベルに到達したとみなし、スクランブル発進も辞さない。』

繰り返す、直ちに戦闘を . . . 』

『 . . . イーダル！これより帰登します』

徐々に離れていく戦術機の後姿を見やり、俺は改めてこいつ思った

「 . . . (助かった)」

寿命が確実に縮まつたぞ . . . それにしても、あの戦術機の衛士、声からして女だったな

しかも何か聞いたことあるような声だったぞ . . . ？

「これより帰還します」

いや . . . 考えすぎだらう、多分

でも、何か引っかかるなあ . . .

じゅう

ユウヤ・ブリッジス？ああ、あれだろ？主人公の器つてヤツ？優秀でありながら止まらない進化

他に愛されるカリスマ

障害にブチ当たっても乗り越えられる度胸

羨ましいね．．．俺にもそんなのがあれば、ここまで後悔はしなかつただろう

失う物も、失う者も、失うモノも、もつと少なくて済んだだろ？

まつたく、神様つてのは意地悪だ

重 side

はい、どーも

元気ですか？お兄さんはこの通り元気です．．．うえふ

．．．嘘です、ぶっちゃけて言つと360度回転での内蔵シェイクと全方向からの強力なGの波状攻撃を喰らつたので、簡単には回復しないです

戦術機降りてから何度も吐きました．．．ごめんよ、掃除のおばちゃん

ただ今、アルゴスメンバーとMAXで寛いでいます

はあ、平和は良いねえ

「それにしても、大尉のあの空中一回転凄かつたな」

カクレリボ、悪い出でやないでくれ、顔面にケロロぐそ

「でも、本当に凄かつたわね

あんな機動されたら、普通回避は不可能よ！」

「凄い凄い言つてるけどな、あんまり需要無いぜ？」

何たって使えるのか――回限りだし

一回以降になると最初の加速で悟られるし障害物の多い低

では使用できなくて場所も限定される

がねえ
・
・
・うえふ

「だ、だいじょうぶですかい？大尉」

きつ一度とやりたくねえ　・・・

「へん！あんなチンチクリンな機動、アタシにだつて出来る！」

なーにがチンチクリンだよ、このスツトコドツコイ！

面倒事は二か起こしやが二で、何でお前の戻ぬぐいせにやならん

の
た

お前が勝手に書り込んで来る

二二七
元亨利貞

「アーティスト！」

「ごあー!? 何すんだコラ! ?」

地獄に落ちるやうに

「てめえがなー！」

・ それにしても、どこのあんな技術を身につけたのかしら?

BETAに有効とは言い難い、謂わば対人戦闘技術よね」

鋭いところを突つくねえ
・
・
・

この連中は未恐ろしいよ、まったく

「 . . . まつ、色々あつたんだよ」

「お？なんだ？おっさん、シリアス気取りか？似合わねえよ、気持ちワリイよ！」

「こ、このクソガキが . . . 嘰らえ！天誅！！」

「喰らうか！」

「あーあー、また始まつたよ . . . ん？」

「 . . . 」

「どうした？ステラ」「

「 . . . ！」

「いえ、何でもないわ」

「（ただの思い過ご）しだと良いのだけれど、もしかしたら彼は . . . ）

「この野郎！」

「甘いわ！」

互いに激しいバトルを繰り広げていると、カチャリ . . . とドアが開く

「「「？」」」

入ってきたのは、旦那と . . . 誰？

「そのまま楽にして聞け

諸君、本日付で我がアルゴス小隊に編入となつたコウヤ・ブリッジス少尉だ

出生は合衆国陸軍戦技研部隊 . . . 何とも頼もしいエリート衛士だな

「（旦那 . . . アンタが言うと皮肉にしか聞こえませんぜ）」

「（こいつが例の . . . フン、実戦経験もない甘ちゃんがどこまで使えるんだか . . . ）」

「フ . . . では、我が隊のメンバーを紹介しよう

イタリア軍より派遣されているヴァレリオ・ジアコーザ少尉

スウェーデン軍所属のステラ・ブレーメン少尉

ネパール軍のタリサ・マナンダル少尉

そして、日本帝国軍、いや、正確には国連軍所属の神無月重大尉

貴様にも馴染み深いあの赤いラプターに乗っていたのは彼だ

「（また旦那は余計なことを・・・）」

「（「イツが・・・！？しかも日本人じゃねえか！何でこんな奴がラプターに乗つて・・・！？）」

「最後に改めて、私はトルコ軍から派遣されているイブラヒム・ドウール中尉だ

最前線へようこそ」

「（イタリア、スウェーデン、ネパール、トルコ、日本・・・BE

TAに祖国を蹂躪された連中の寄せ集めってことか

違う・・・オレは合衆国民だ、寄せ集めのひとりじゃない、こいつらとは違う・・・）」

「さて、自己紹介も終つたところで互いに親睦を深めるとしよう
ブリッジスの着任祝いに実機演習を行う・・・想定は”CASE・47”だ」

「（”CASE・47”・・・市街地における一機編隊同士の対人戦闘演習

通称、旦那流新人公開リンク歓迎方法である

頑張れ、ユウヤ・ブリッジスとやら・・・

俺もその道を辿つてきた1人だ、そうやつて痛めつけられて人間は大人へと成長するのさ）」

「それと、神無月大尉」

「やだ」

「まだ何も言つていませんよ」

「どうせ旦那は良からぬ事を考へているんでしょうが

俺はなあ、どこそのバカ！の起こした面倒事で体が悲鳴上げてるんだ、休ませてくれ

「（ここのクソオヤジが・・・あとで殺す！）」

「残念ですが、それは叶いそうにありませんよ

何たつて、最高責任者クラウス・ハルトヴィック大佐から直々の
出頭命令が出ています。貴方に

「あんの、クソヤローめ……何の嫌がらせだ?」

「そう、貴方の言つクソヤロー様からの直々のご命令です

いやはや、有名人は辛いですね……」

「あー……そうやって、旦那は俺を虐めるんだ!

良いさ行つてやるよ、大佐がなんぼのもんじやいボケエ……」

だん!と立ち上がり、颯爽と部屋を出していく

くそ、上手いこと旦那に乗せられてしまった……敵わぬよ畜生め

……しばりくお待ち下さい……

「いこか?」

何とかあの野郎のいるところまで辿り着く

そして、ドンドン!と乱暴に扉を殴る

「おおーーー来てやつたぞ!茶菓子ぐらいは用意できただろうな
?」

「入りましたえ」

「何が入りましたえだよ、どんだけ苦労したと思つて……」

愚痴りながら扉を開けるとそこには

「はつはつは、久しぶりだね」

ハルトウイックと……

「どうも、宜しくお願ひします……神無月大尉」

我らが鬼神、篁唯依嬢の姿があつた……

即座に回れ右!方向転換の後は、戦域を離脱する……だつて勝てるわけねえじやん!!

「失礼しました、任務に戻ります！」

「ビルに行かれるんですか？」

۱۰۷

「まあ、座りたまえ、昔話でもじつくりと堪能しないつじやないか」

「大切な客人を呼んで何が悪い？」

「腹の内で何考えてやがる」

酔し言れ様なれ

「ああ、たゞ……ホントは君の話で、たぬきなんかのかよ」

「何がたまにはだよ　．　．　．　で、なんで唯依ちゃん　．　．　．　篁中尉がいん

の？」

「刀井三一、二三郎のハセキ、二十四の二刀、

「……おの岡山も益々うらやましいだね」

「しょうがねえだろ？ 訳も分からず飛ばされたんだから」

その概要は彼女に教えて貰ひました

- > -

簾 side

目の前で、ハルトウイツク大佐と神無月大尉が談笑している

話からして、昔の事だと察することが出来る

（…しかし、だからといって上回りをしてあるような言葉遣いは酷すぎる）」

後で注意しなければ . . . そう思つていたときだつた

「しかし、彼女は君がいなくなつて随分と寂しがつていたと聞いて
いるが . . . ?」

「（彼女？）」

「おいおい、誤解を招く言い方は止せ

大方、ハツ当たりする対象がいなくなつてイライラしてんだろう
な」

「彼女も報われないね、彼女は彼女なりに君の拠り所になろうとし
ていたというのに . . . 」

「だから、そんなんじゃねえって

確かに付き合いは長げえけど、そう言つ関係だつたときは少なく
とも一度もない！」

「（付き合いが長い？）」

「君が一方的にそう思つているだけだよ」

「冗談じやねえぞ、あいつに撃たれた銃創が未だに痛いんだよ
仮に俺とあいつが夫婦になつてみる、俺なんかあつという間に喰
われるぞ」

「（夫婦？）」

「それは性的な意味かね？」

「違うに決まつてんだろ！ やつぱりお前バカだろ！ 命が危ねえつて
いう意味だ！」

「やれやれ、しかし、彼女が寂しがつていたのは事実だ
あのように、腹の内を明かし合える仲など彼女にとつても心の支
えだつたんだろう」

「あのようにって . . . お前西ドイツ所属だろ？ が、何で東ドイツ
のあの女の事をそんなに知つてるんだよ」「何だかんだで彼女は有名だつたからね

「それだけかよ」

「他にいもあるが、君には教えない

「子供が、お前は」

「そう言えば、これは教えておいた方が良いだらう . . .
君を血眼で追つていた連中も一部、なかなか諦め切れていないらしい」

「『亡命者狩り』. . . 所謂”Escape killer”か
ドイツを出るとき、何度も殺されそうになつたものか . . .
特にあの赤目の中には参つたね、しつこいつたらありやしねえ
「流石の Bloody Eater も Escape killer には恐れおののいたか？」

「馬鹿、生身でどうやつて戦術機と戦えつていうんだよ」
「はつはつは、確かにそうだな

しかし、逃げ切れた君には感服するよ
「ギリギリだつたけどな」

「. . .」

沈黙が訪れる

すると、ハルトウィック大佐が口を開いた

「. . . もう一度」

「あ？」

「もう一度戻つてくる気は無いかな . . .」

「ドイツにか？」

「きっと彼女も喜ぶぞ」

「（ツ！）何を . . .」

言つのですか！？とこう言葉を辛うじて飲み込む

上官の発言を遮るというのは許されざる行為 . . . 何とか押しとび
めた私を自分で褒めても良い

それ程大佐の発言は衝撃的であった

「その話はもう良いって」

「話は簞中尉から聞いた . . . 君は国外逃亡したそつじゃないか」

「. . . ああ」

「なら、今の君は”生かされている”状況だ

使い捨ての駒として、無惨にも戦場で散つていいくのは目に見えている

例え君がどんなに理不尽だと叫んでも、”裏切り者”的レッテルを貼られた君の声を真剣に聞いてくれる人間は日本に居るのか？」

「……」

「篁中尉の前でこうは言いたくはないが……今の日本に君の居場所はあるのか？」

「……」

大佐の問いに答えるなら、誰もが首を横に振るだろう
一時は銃殺刑までもが決まったのだ、こうして彼が生きている状況は奇跡に近い……と同時にプライドと面子のため、彼の生を疎ましく思うものも多い

巖谷叔父様のような接し方を出来る人間は日本に数えるほどしか居ないだろう

殆どの者は、隙あらば彼を抹殺しそうな勢いだ

「……それは、ドイツも一緒にやないのか？」

「君を連れ戻すのは上層部からも度々意見が上がっていた

何がともあれ、君が祖国のために命を張つて戦つたのは事実

感謝することはあっても殺すことは無い……君さえ承諾すれば

歓迎しよう

「……」

「どうかね？」

私にはどうすることも出来ない……ただ彼の返事を待つばかりだ
確かに日本については彼の苦しみは増すばかりだろう

なら、彼はきっと大佐の差し伸べた手を……

「何とも魅力的な誘いだが……すまん、その申し出には答えられない

「（え……）」

「ほう……理由を聞いても言いかね？」

「理由なんてそんな大層なものはない、これは俺のクソみたいなア

ライドが関わっている

物事には筋を通さなければいけない、自分で時いた種は自分で刈らなければならぬ……全てのはじまりは、俺が国外逃亡つていう馬鹿な真似をしちまつたせいだ

なら、いつかそれに決着を付けなくちゃならない時が来るのも承知の上

「う言つちや悪いが、今ここで逃げ出したら俺は一生立ち直れないね……それどころか、生きてること自体に後悔することになる、それだけは……嫌だからな」

「……だが、結局その先に待つているのは、どのみち不条理な死だけだ

戦場で見捨てられ犬死にか、裏切り者の公開処刑か、はたまた人知れず暗殺か……君はそれで良いのかね？」

「不条理だとか、理不尽だとかはこの世に腐るほど溢れかえつてゐる……別段俺が不幸つて言つ訳じやないからな……
もしもそのどちらかの局面が訪れたら……最後まで抗つてやるぞ死ぬ為に戻つた訳じやねえからな」

「（大尉……）

「フツ、相変わらず愚かな男だよ……君は

「よく言われる」

「まったく、私は彼女に何て言えば良いんだ?」

「俺は元気だ、お前も精々くたばんないよつに頑張れ……とでも伝えておけ」

「駄目だ、そんな素つ氣ない言葉は許さんぞ」

「……そうだな、俺は元気だ、今度会つたとき楽しみにしてるで良いだろ?」

「……まあ、良いだろ、確かに伝えておいつ

「無理しなくて良いからな」

「はつはつは、確實に伝えておいつ

「愛してるぜ、マイ・ハイター」とな

「何か内容が180。違うし」

「では、私は会議がある……またの機会に会おう、友よ」

「……はいはい、またな、友よ」

「フツ……」

ハルトウェイック大佐が退室する

残されたのは、私と神無月大尉のみとなつた

「……さて、俺達も帰ろうか」

「神無月大尉……」

言葉が出てこない

何故、わざわざ苦しい道を行くのか……？
あなたは臆病ではないのか……？
どうして、平然としていられるのか……？
聞きたいことは沢山ある……
しかし、それを察したかのように大尉が語る
「何も言わなくて良いさ……」

これは、俺なりの”けじめ”的付け方だ

今まで散々好き勝手にやつて来たんだし、少しくらい苦しくたつて文句は言えねえ

「……その先に、大佐の言つていた”理不尽な死が”待つていた

としても……ですか？」

「その時はその時だ……だが、すぐに訪れる訳じゃないんだろう?
だったら不確定な未来に怯えるよりも、いまできる最良の道を選んでいけばいい

もしかしたら、その果てに待つているのは”死”とは限らないからな

「そう……ですか」

この人は本当に臆病で出来損ないなのか……？否、それは表面的な部分に過ぎない
もし、何かが違っていたら彼はきっと誰もが認める英雄となつていたとしてもおかしくは無かつただろう

ただ、彼は貧乏くじを引いただけ……それだけである

「さて、辛氣臭え話はここまでにしようや

明日から、本格的に仕事が始まるんだろう?」

「あ……は、はい

「じゃ、体壊すなよ~」

先に扉へ向かおうとする神無月大尉……

その背中は、何故か寂しく思えた

「あ、あの! 大尉!」

「ん? 何だ?」

「……た、大尉もお体に気をつけて

フツ、と微笑む大尉

今まで見せたことのない優しい笑みだった

それを向けられて、思わずドギマギしてしまつ

「大丈夫さ……伊達に歳月を重ねてはいないからな

そのまま退室していく……

だが、その背中はやはり寂しそうであった

重 side

「ふう……」

軽く疲労感が残る……

何故ハルトウイックは唯依ちゃんのいる田の前であんな話を切り出したのだろうか?

幾ら何でも無茶苦茶だぞ……それに、まるで俺の答えを予め知つていたような雰囲気だった

伊達に長く付き合つていかないんだ、それくらい表情を見れば分かる
だが、あの答えに嘘偽りは無い……帰国するときに決心していた
ことだ

例えその先にどんな死に様が待つていようと構わない……しか
し、俺は潔くソレを受け入れるほど勇敢ではない
故に、その状況が来たのなら全力で抗つてやるさ
天寿を全うするまで、恨まれ役でも何でも良いから生き残る……
矛盾していく自分勝手で我儘なやり方だが、やっぱ死ぬのは恐いし、
痛いのも嫌だ

「面倒臭いな……」うつ言つのはやっぱり柄じゃねえ

平和が一番だよ、やっぱり……

きっと俺は生まれる世界を間違つたんだな……うん、絶対そうだ
子は親を選べないと言うが、生まれる環境から世の中まで選べない
なんて酷すぎる話だ

今更ながら、整備兵とか羨ましきる……今からでも遅くはない
かな？

「……いやいやいや、流石に駄目だろうそれは」「

さつきあれ程格好いいこと言つといて何考えてんだ？俺は……

「……やっぱり駄目だなあ」

自覚はしていたが、ここまで酷いとなると正直自分がどれだけ駄目
な奴か思い知らされる

自己嫌悪とか、もうそういうのが可憐く思えてくる程に……こり
や末期だな

「随分と絞られたようですね？」

「……イブラヒム」

「貴方が私の名前を呼ぶとは……重傷ですね」

「ほつとけ」

「……貴方は一見大胆に見えて纖細だ、大雑把に見えてマメなど
ころがある」

「……」

「……」

「フ . . .

そこまで自分を否定する必要はないある？

お前の歩ってきた軌跡は誰にも否定できないよう、わざと自分を誇つても良いんだぞ？」

「何を知ったような口きてんだよ」

「私とお前は一時期長らく背中を預け合つた仲だぞ、それくらい言わせる

お前は、少しキャラキャラしていた方が丁度良い」というものだ

「 . . . そんなもんかねえ」

「そんな沈んでいたら、あいつらに示しが付かないぞ？」

特にタリサに至つては、気持ちワリィ . . . で一蹴されるのが田に見えている

馬鹿らしくないか？」

「 . . . 違いねえな」

「なら、あれこれ考えるのは後にしたらいつだ？」

お前は、口より先に手が出るタイプだろ？

「確かに」

流石田那、よく解つてらっしゃる

「（俺が辿ってきた軌跡 . . . か）」

確かに、頭を使うのは上の連中の仕事だな

俺達衛士は、体を動かしていれば良いという者

考える時つていうと . . . 敵の数とか、弾の残り数とか、光線級の攻撃とか、逃げる算段くらいか

ここで悩んでいるのは田那の言つとおり野暮だ

「いつも通りに逝きましょうか？」

「 . . . そうだな、人生前進あるのみだな

「そうですよ、では . . .

「元気に逝くか」

さて、俺の戦いはまだ始まつたばかりだ

こんなところで蹴躡いてたまるかよ、こん畜生！――

いれぶん

俺は最強になりたい

俺は反則チートに憧れる

俺はバケモノと呼ばれる力が欲しい
子供ガキの頃から渴望してきた . . .

そして今でも飢えている

だが、老いが進むばかりで何も変わらないぜ . . . まったく

灼ける大地 . . .

そこら中に転がる肉片 . . .

真つ赤な空と太陽 . . .

現実味のない、だが . . . やけに印象強い光景だ

「 . . . 」

俺はその死の滴る道を戦術機に乗つてただ歩き続けていた
何故か重々しい疲労感が俺の体にのし掛かつており、今にも倒れそ
うな機動だった

しかし、歩みは止まらない . . . 俺の意思とは関係なく俺の体は動
き続ける

「（どこだよ、ここ . . . ）」

見渡す限りの死の山 . . . B E T Aは勿論、戦術機等の兵器類の様
々な残骸、果てには人の死骸の山までもがある
「誰かいないか？」

「 . . . という虚しい声が辺りに響く

しかし、返答は無い

「参ったね、どうも．．．ん？」

その時、微かだが”音”が聞こえた

「（銃声．．．しかも戦術機の突撃砲の音だ）」

自然と体が動く．．．当然、戦術機もソレに答え、急加速する

「一体誰がドンパチやってんだか．．．」

そんな咳きと共に目に入った光景．．．それは

「！」

幾多のB E T Aの軍勢に、”たつた一機で”立ち向かっている戦術機だった

いや、彼にとつて重要なのはそこではなく．．．

「（あの戦術機は．．．ツ！クソ！間に合え！－！）」

そう、そのたつた一機で立ち向かっている戦術機．．．M i G - 2

1 P F バラライカ

彼にとつても馴染み深い戦術機、嘗て幾多の戦場を共に戦い、共に戦場を乗り越えてきた大事な戦友の駆る機体だ．．．そう、彼女の乗る戦術機だ

その傍へ駆け寄りうと、急加速させよつとした、その時であつた

「ツ！－！何だ！」

ガクン！と機体が傾く

原因を探ろうと足下を見て、ギョッとした．．．今までただの屍の山だつた者達が突如動き出し、自分の戦術機の片方の足を引っ張つているではないか

人間の死骸、戦術機の残骸、B E T Aの肉片がじちゃ混ぜになつて怪物のような手になり、自分すらその一部にしようと引っ張るのだ

「クソッたれが．．．放せ！－！」

しかし、言葉が通じれば苦労はしない

巨大な豪腕はぐいぐいとしつこく引っ張つてくる
ふと、自分が突撃砲を握っていることに気がつく
即座に照準をその豪腕へと合わせ発砲する

響き渡る連續した銃声　・　飛び散る腐敗した肉片、戦術機の残骸

漸く拘束が緩んだところで、その醜い腕から力ずくで逃れる

そして再び急加速、今度こそ彼女の元へ駆け寄る　・　だが、その時であつた

クソ忌々しい奴　・　光線級が目に入った

そして、狙いを定める先にはあいつの機体　・　しかし、あいつは気づいていないのかはどうかは知らないが、ひたすらに目の前のB E T Aと戦い続けている

「この　・　アホんだらが！」

光線級の目のような部分が光り、レーザーが照射される

しかし、間一髪であいつの機体だけは突き飛ばした

「どけろ！アイリス！…」

『…』

目の前が光に包まれる　・　・

回避は不可能、見事直撃だ

『…』

最後にあいつが、何か叫んでた気がするが　・　・さっぱり聞こえなかつた

重 side

次の日になりました

今日も前途多難な一日になるだろうな

「 . . .

つて言つとか寝起き最悪なんだけど

多分、最高に胸糞悪い夢を見たせいだ . . .

「 . . . あれ? どんな夢だつけ?」

まあ、その前に夢の内容が思い出せない

結構印象強い、今まで悪夢ベスト3には入るほどだつた気がする

けど . . .

「 . . . 思い出せねえ」

うーん . . .

でもまあ、ケロッとした忘れるくらいだ、案外大した事無かつたりするのか

「まあ、良いか」

さて、そろそろ起きて準備しますかね . . . 今日もお仕事お仕事

- - - - - じぱりくお待ひトセ - - - - -

いつも通りの部屋へ行き、アルゴスメンバーと顔を合わせる

「おーっす」

「おっ! 大尉おれーす」

「はいよ、おはよーさん」

「おはよ!」

「はいはい、おはよ!」

「あ、クソオヤジ」

「 . . . お父さんは、お前みたいなクソガキを育てた覚えはありません

せん

育てるなら、万人に愛されるお淑やかで可憐で聰明な子に育てま

す

「あんだと？朝っぱらからケンカ売つてんのか？」

「何だよ、こいつちゅやるか？」

「上等だ！」の野郎！』

「受けてたつてやるよー！」ん畜生！』

本日の第一戦目 . . .

だが、困ったことに寝起き最悪の俺はコンティーションがイマイチだ

長期戦になれば不利なのは明か . . . これは短期戦だ！

「大体何がお淑やかで可憐で聰明だよーお前に出来るわけねえだろ

！ . . .

「うるせーー少なくとも、お前みたいな残念な子にはしたくない！」「アタシのどこが残念なんだよー！」

「色々とー！」

「んだと『アアー！』

ぐ・ぐ・ぐそり、中々やるな

どこの戦闘民族だ？」のチビ助は

コウヤ side

俺はヴィンセントと別れていつも部屋に向かっていた
ふと、中が騒がしい

つるさいな、と心中で愚痴りながらもドアを開ける

「シヒーーーーー！」

「気持ちワルツ！？なんだソレ！？」

「油断したな！隙ありじゃボケエ！」

「甘ーんだよ！グルカ嘗めんな！！！」

「グルカ？食堂行け！」

「グルメじゃねえよ！！」

「うるせえな、まったく」

「お、トップガン来たか」

「何騒いでんだ？あの2人」

「いつもの事よ、2人にとつて挨拶のようなものね」

2人 . . . 1人は昨日模擬戦の相手だったチョビ

もう1人は . . .

「ぜえ、ぜえ . . .」

「ほらほら、どうした？おっさん息が上がりってるぞー。」

「 . . . バーカ、嘘じやボケエ！」

「あつ . . . ぶねーなボケエ！」

「チツ、避けやがったか」

「へへん、当たるかつてんだ」

もう1人は日本人のおっさん . . . 神無月重大尉

聞くところによると、各国では言わずと知れた有名な衛士らしい
だが、どうにも納得出来ない . . .

それに、何でこんなバカみたいな奴がN 22 Y Fに乗つてるのか分
かからねえ

「おおーい、その辺にしようぜお一人さんよ」

「 . . . 」

「 . . . 」

マカロニが声を掛けるも、2人の戦闘態勢は収まる気配はなく、む

しろ互いに牽制を掛け合っている

「いい加減にしないと、イブラヒム中尉に怒られるわよ？」

大尉はともかく、タリサは既に一回前科があることを忘れてない
でしょうね？」

「 . . . まつ、ここは一時休戦といこつか？」

「 . . . ちつ、分かつたよ」

互いに背を向け引き下がる2人

「（やれやれ、やつと終つたか）」

だが、その認識は甘かつたとしか言いようがない

このバカ2人、バカな癖に変な意地だけは一級品なのだ

「なんて . . .」

「言つと . . .」

「「「！」」」

「「思つたがボケエエエエエエエエ！」！」

見事なクロスカウンターが互いの頬に決まる
この勝負、どうやら相打ちなので幕を閉じた

「「（こいつらアホだ）」」

多分、他の2人も同じ事を考えてんだろうな . . .

重 side

顔面に、このチビのクロスカウンターが見事決まった頬を、一生懸命丹精込めて出来るだけ優しくなでる . . . くそ、あのチビめ、容赦なくぶつちぎりやがった

「（痛いの痛いの飛んでいけー . . . つてか）」

これを考へた奴はどうやら頭のネジが全部吹つ飛んでいると見える
こんなので痛みが消えたら世界はもつと穏やかになつている筈だ
「（痛てて . . . あのおっさんめ、躊躇無くぶちかましてきやがつ
た）」

「（この借りは . . . ）」

「（必ず近い内に . . . ）」

「（（倍にして返してやるよーー））」

「そいや、今日XF計画の主任が来るらしいんだけど何でも、由緒正しい日本の家系らしいぜ？」

「ああ？ ネパールで言うグルカみたいなもん？」

「お腹すいたなら食堂行け」

「だから違うって言つてんだろ、バカ話をかき乱すな、バカ」

「2回言わなくても良いだろー？」

バカ×クソ×チビ . . 略してバクチ

「死ね、マジでダメなオッサン

略してマダオ」

「タリサも乗らない . . でも、グルカは世襲派でしょう、少しニュアンスが違うんじゃないから」

「 . . フン、サムライだか二ンジャだか知らねえが

BETA相手にカタナ振り回す連中だろ？ 時代錯誤も甚だしいぜ

「大尉の前で言つね～トップガン

昔の女とか？」

「違げえよ」

ユウヤとやら、それ唯依ちゃんの前で言つてみる、引きちぎられるぞ . .

「（大尉、良いの？）」

「（あ？ 何が？）」

「（ . . 彼、貴方の祖国を思いつきり言つてるけど）」

「（良いんじやね？ 人それぞれ思うところがあんただろ

特に日本と米国の戦術機運用を比べれば分からなくもないし . .

個人的に言つても、日本にいた年数は他国にいた時と比べても

圧倒的に少ない俺にはイマイチ実感が湧かないんだよね）」

「（あ . . それは器が広いと褒めるべきか、適当と避難すべきか微妙なところね）」

「（前者でお願いする）」

「（……考えておくわ）」

「アタシは堅つ苦しい奴じやなきや誰でも良いけどね～「（ないない、それは絶対にない）」

「その時、入り口の扉が開き、旦那が入ってきた

「おはよう、諸君……神無月大尉、少し良いですか？」

「やだ

「まだ何も言つてませんよ」

「それでもやだ」

「主任を前にしても、同じ事が言えますか？」

「前言撤回します」

「（扱いやすい人だな）……それ程難しい用事ではないですよ、直ぐに今言つハンガーヘ向かつて下さい」

「え、～～～」

やつぱり、嫌だ……やつぱりお申つとしたとき、旦那の後ろで鋭い眼光が煌めく

言わずもがな、誰かは言わない

「今すぐ行つてきます」

即座に退室、即座にダッシュ、いざハンガーヘ……こん畜生

…………しづらくお待ちひたさい…………

「で、何で俺ここにいるワケ？」

「何も聞いていないんですかい？」

「そんな暇無い、ダッシュで来たからな

整備ボスよ

「ボスつて……ハア、話に聞いてたとおりの人だ」「で、何か用？」

「なんか、何処かのお偉いさんが来て、大尉にこれでテストをせろと命令してきましたよ」

「……嫌な予感しかしねえよ、どこのお偉いさんだよ」「さあ、よく分かりませんでした……」

「おい！お前ら！大尉に例の物を見せてやれ！」

「こいつは……」

見た事ねえ機体だな、新型か？

「MiG-701つて書いてありますね……」

「おいおい、MiG-701つて……」

「知ってるんですか？」

「ああ……昔友人からちょっとした話を小耳に挟んだ何でも、こいつは破棄された計画の筈だが……」

「破棄された計画……ですか？」

「詳しい理由は別段興味は無かつたから覚えてねえが、間違は無いだろうな……」

「そのお偉いさんつてどんな奴だつた？」

「黒服を着て、いかにも國家の重鎮つて感じでしたね
テストが一段落したら、取りに戻ると言つていました」

「ふーん……（現代に蘇つた亡靈つてところだな、さて、影のネ

クロマンサーはどこのどいつだ？）」「……どうします？」

「どうしますって……俺達衛士は、『えられた任務に文句は言えん
乗つてテストするしかないだろ？お偉いさんからのリクエストな
ら尚更だ』

「……難儀な職業ですね」

「何を白々しく言つてんだよ」

「別にそんなつもりじゃないですよ

「これ、仕様書です」

「はいよ、どれどれ……」

なんじや「リヤ！？」

「……どうかたんですかい？」

「……無茶苦茶な設計だな、オイ」

「……つて言うかこれは、何というか

「（確かに対BETAに有効だろうが、これではまるで……いや、十中八九で戦術機同士の戦闘を意図した仕様になってるぞ……）「エンジンの主機出力だけでも相当な数値だ、特に瞬間的な速度は恐らく圧倒的だ

それだけじゃねえ、武装の種類が豊富すぎる

火力だけで見れば、戦術機の中でもトップクラスだな……とにかく空いたスペースに武装をねじ込んでやがる……スタイリッシュな外見とは裏腹に、えらくバランスの悪い戦術機だなまさに一撃離脱の仕様だ……そして、その豊富な火力でコンマ何秒かで敵を削る、一撃必殺をも目的としている

こんな無茶苦茶な機体、乗り続けてたら中の衛士にどれ程の負担が掛かるか……想像したくもねえ

「……人体実験、か」

「？」

攻撃力と機動力をとことん突き詰めすぎた、ある意味最悪の機体だ
・乗つてる奴の事なんだ、まるでお構いなしの”衛士殺し”の戦術機

そして、こんな事を知つてて実行するのは俺の知つてている中で1人しかいねえ……使える駒は何でも使う

嫌な性格は相変わらずじやねえか、あの野郎

「まつ、あれこれ言つてもしそうがねえ……直ぐに準備してくれ

「了解」

嫌だなあ……これもう失敗作決定だろうが

何なんだよ、あの野郎はよお……俺を殺す気かよ

絶対知つてやってるよ、質悪いなあ……

……………しばりくお待ひトセコ……………

やつと着替えて「コックピットに搭乗

さあ、行くぞ！

「行つてきま～す」

グン・・・と機体を加速させる

本来なら、ゆっくりと速度が上がっていくはずだが……

「おおづ…？」

グン！とこきなり速度が上がる、それにより一瞬視界が真っ白にな
つた

「！？」

そして、気づいたときには遅かった……

ガターン！…と震つ大きな音と共に、衝撃が肉体を襲つ

目を空けると、地面が見える……何で？

しばらく考えていると、通信が入ってきた

『あのー…大丈夫ですか？』

「現状が理解できないんだけど、何があったの？」

『盛大に転びました』

「…マジ？」

『はい』

なるほど…、それなら納得…地面が見えるわけだ
つまり、俯せになつているという事か

（なんつーピーキーすぎる機体だよ、まったく…最初から全
力疾走じやねえか）

『問題があるようでしたら、テストを中止いたしますか？』

「いや、続行だ…何ともない」

ゆっくりと機体を起きあがらせる

『では、テスト内容を確認します . . .』

気を取り直していきますか

その頃、別のテストサイトでは . . .

「驚いたぜコウヤー！」

オレやタリサのスコアを軽く上回りやがるとはなあ
新入りなら少しばかり遠慮しろよ～？」

「ま、この手のコトは米軍でさんざん叩き込まれてきたからな
これでお姫さまも舐めたクチきかなくなるだろ」

「おじおい、女には優しくしておくれんだぜ～？」

「あんな堅物そうな女のどこがいい . . . !

2時方向よりドローン28機高速接近中！どつかのヘタクソが撃
ち漏しでもしたのか？」

「向こうのテストサイトはソ連軍が使っているな、追撃している戦
術機が一機

SU-37UB・チュルミナートル

「！」

「．．．このカンジだと演習エリアの外縁空域まで到達するんじゃ
ねえか？」

せつかくだし、近くまで寄つて撮つておこうぜ、映像記録

「ああ（気にくわねえ任務だったが、少しほ楽しめそつじゅねえか）

「

またまた戻つてこちら、MiG-701のテストサイト
そこでは、一機の戦術機が複数の無人機に追われていた

「オイイイイイイイイイイイイイイ！」

『どうかしたんですか？』

「何他人事みたく言つてんの！？」

何でドローンが実弾兵装してんだよ……マジで死ぬわ…………
うえふ！

その前に、マジで色んなモンが出るわー内蔵飛び出るわーこの戦
術機どんだけ辛いか知つてる！？

『仕方ないです、耐えてください

耐えながらペイント弾でドローン全機落としてください』
「やつてるよ！……つて言つたか何でペイントが直撃したドローン
がお構いなしに襲つてきてんの！？機能停止させろよ！離脱させろ
よ！未だに戦力比が1対多数なんだけど！？」

『それがこのテストの醍醐味です、お楽しみ下さい』

「楽しめねえよ、ドローンに殺されるとか洒落になんねえよーその
前に戦術機に殺される！」

うわ！？今掠つたぞオイ！！

これがシミュレーターならまだしも、現実なんですねび……
さつきからガチで殺す氣だぞ、アイツら……どうじゅうひと言つん
だよ

ペイントで当たった奴等も何か襲つてくるし、気を抜いたら殺される
し、その前に……
「オウ……ウエーブ」
は、吐きそうだ
この戦術機、速度が上がり下がりが急すぎる

内蔵がシコトイクされすぎて、体内で軽くジースが出来てゐに違いない

「 . . . ジ、うつぶ、なつたら、腹を括るしかねえ」

やつから括つてゐけど、もつと括るしかないぞこれ . . .

「ドローンが！調子にのんなあ . . . 」

一気に機体を急加速 . . . しよつと黙つたけど、やつぱ止めといた、

辛い

「 . . . 」

やつぱいのままの速度で隙を見よつ . . .

コウヤ side

『ん？』

「どうした？」

最初に気づいたのはマカローだつた

『向こうからも、何か来るな . . . 』

「 . . . 』

丁度、チュルミナートルの反対側の方角から、何かが見える
よく見ると . . . 戦術機が複数のドローンに追われていた
それだけではなく、ドローンからは連續した曳航弾が見える
その曳航弾は、戦術機に掛けて飛来するが、当の戦術機は難なく避
わしている . . . ように思えたが

『おお！良いところに！』

『何やつてんですか？大尉

て言うかその戦術機は？』

『よくぞ聞いてくれた！簡単に説明するぞ、何か乗れって言われて乗つたら、実弾兵器を搭載したドローンを全機打ち落とせって言われた』

聞き覚えのある声、あの日本人、神無月重大尉であった

『と、言つわけで手伝つて！…』

『…どうする？』

「…」

情けなさ過ぎて何とも言えない . . .

オレとしては助ける理由も手伝う理由も全くない
それどころか、日本人の言つ事なんて聞けるか

ほつとけ . . . と言おうとしたときだつた、何やら通信が入る

『こちら、MIG-701のオペレーターです

くれぐれも！その機体に手を貸さないで下さい』

『オイイイイイイイイイ！…！

そんなに俺のこと虐めて楽しいか！？お前友達いないだろー！』

『そんなことより、大尉

直ぐにテストサイトに戻つて下さい、どんだけコースから外れるんですか

流れ弾が貴方の他の機体に当たつて取り返しが付かなくなつたら、
責任は貴方に取つて貰います』

『ふざけんなババア！コラア！…！

何でここの人間は俺に対し意地悪なんだよ！』

『…そう言つ態度が原因していると思いますが？』

『嫌だ！俺はここを離れねえ！どうせなら2人も道連れじゃあ！…！
何を血迷つたのか、このバカは俺達2人の方に突っ込んできた

・・・当然、後ろのドローンもオマケ付きだ

『あ、――！もう、いい加減にしろよダメ人間、コラア！…お前に
付き合わされるこっちの身にもなつてみろ！…』

『オペレーターさん！なんかキャラ変わつてるよ！…』

『さつせと全機落として来い！お前さつきから逃げてばっかじゃねえか！』

『機体の感覚が掴めねえんだよ！何だコイツは！？モンスター馬シンじやねえか！』

『何で俺の周りはモンスターだらけなんだよ！お前も含めてな！』

『もう一回言つてみる！このクズ野郎！！』

「……やっぱアホだ」

取り敢ず、安全地帯まで遠ざかつてヒュルミナートルの機動を見る西側では、紅の姉妹とか言われて恐れられているようだが……

「（イマイチ感じられねえな、この程度なのか？）」

いや……そうじやねえ

「やっぱドローン相手じや燃えねえよな」

オレは機体を急加速させる

ヒュルミナートルが最後のドローンへ接近していた

そのドローンへ照準を絞り、トリガーを……

『はい。邪魔』

「……は？』

大尉の機体が目の前を横切つたかと思つと、通り過ぎ様に腕を横薙ぎにする

どうやらそのドローンが邪魔だつたらしく、薙ぎ払われたドローンは飛行能力を失い、地に落ちていつた

「……」

『ギャー――！』

テメエ！何ソ連領に進入してんだ！国際問題だぞ！？』

『いちいちうるせえなあ、ちよつとくらい良いじやん

分かった分かった戻れば良いんだろ戻れば

ドローンに追いかけながらも大尉がこっちの空域に戻ってきた

『ようやく機体の感覚が掴めてきたぞ……そんじやまあ、攻撃いつてみますか』

即座に反転すると、ドローンに向かつて突つ込んでいく

「（速戻 . . . ）」

弾丸が飛び交う中、滑るようにして次々とペイント弾をドローンに命中させていく . . .

遂に最後のドローンがペイントで染まる

『 . . . テスト終了』

色々言いたいことがあるので、早めに戻つて来て下さー』

「 . . . 」

成程、ただのバカではないってことか

『オウエエエエエエエエ！』

『大尉！そこは流石にヤバイって！早めに帰還しないと…』

『そーする . . . 』

・・・やっぱりただのバカだつた

そう思つてみると . . . ゾク！っと背中に悪寒が走る

振り向いてみると、チャエルミナートルが空中に静止しながら、ある一点を見つめていた . . . それは、大尉の戦術機
今にも襲いかかってきそうな勢いだ

そりやそうだろ？、あんな事されれば誰だつて怒る

しかし、チャエルミナートルはそのまま反転し、向こう方に飛び去つてしまつた

「 . . . 」

『ユウヤ、俺達も戻るつづぜ？』

「ああ . . . そうだな」

じゅうえんぶ

俺達がやる戦争なんて、ババ抜きと大して変わらない
ババを引いた奴は死あるのみだ

その中で英雄なんて呼ばれてるのは、卓越した戦術眼と巧いイカサ
マしてるせいだ

まあ、本当の戦いは何でもありだ、だったらそれもありだと思つ
どね . . .

俺？俺は運が良いだけさ、偶にフォルドして勝負を下りるけどな
勝ち目がないなら逃げるのもまた一手さ . . . かなり恨みを買ひけど

重 side

「良いかーてめえら」

「？」

急に何言い出すだと？まあ、聞いとけつて

「ここには任務で来てるんだからな！」

ミッションドミッション、遊び感覚ではしゃぐんじゃねえぞ！
シミュレーターとは言え戦場は魔物だ、気を抜いたらあーっと一
う間に呑み込まれんぞ」

「大尉、それ人に言えるか振り返つてみてはどうスか？」

「そうね、一番心配なのは貴方ね」

「おっさん意味分かつて言つてんの？自分に言い聞かせろよ」

「 . . . 」

「こ、この連中は . . . 人がせっかく渴を入れてやつてんのに！」

「それよりも、その頬に当たったガーゼは何？」

「……触れないでくれ、傷に染まる」

色々な意味でな……

あのテストの後、ちやつちやと帰った瞬間オペレーターにタコ殴りされた

土下座してようやく許して貰えたが……見ての通り、恐ろしい破壊の爪痕がくつきり残ってしまった

地獄絵図を生きながらにして垣間見るとは……人生何が起るか分かんねえな

「まあ、俺はどうでも良いくとして……今回は西と東の共同作業らしい

内容は、みんなで協力して仮想・BETAを迎撃とう……だ良かつたな）、俺はこうこうミツショーン大好きだぞやつぱり人間は互いに手を取り合つべきだよ、ウン」

「何なのそのぬるま湯みたいな言い草、ムカツクんだけど」

「おめえには、初から何も期待してねえよ、チビ助が

今回は面倒事起こすなよ、もつ一度と尻ぬぐいなんざ嫌だからな

!—!

「うつせーよ、誰が頼むか！」

「頼まれてもやんねーよーだ！」

「いい加減にして頂戴、遊びできるんじゃないんでしょー?」

「そうだつたな、スマンスマン」

「……ハア、まつたくもつ」

「よーし、各自準備始めろよ~

そんじゅ、仮想戦場で会おう

じや、俺もある機体に行きますか……MiG701、通称”コンドル”

俺が名付けたんだけどな、結構格好いいだろ?

何故みんなのところからじやないかって?そりゃあ、あの機体は少し離れたところにあるからだ

完成されているとは言え、非公開の戦術機だ

まだ他の奴等と並べるには早いと、あの男は判断したんだろうな···

·真相は知らんけど

「フンフンフーン」

鼻歌歌いながら移動する

何？いい歳扱いて鼻歌歌うなんだあ？

良いじやないの、別に減るもんじやないし

「ん？」

そういうしていると、件の戦術機の元に辿り着く
だが、その戦術機の前に誰かがいた

「あ、どうも」

「···誰？」

「こりや、失礼しました

ヴィンセント・ローウェルって言います、自分

「ふーん···

で、何か用？いや、この機体に用か？」

「そんな睨まないで下さいよ、ちょっとした個人的な興味ですよ」

「···興味本意で首突つ込むなよ

こいつの裏には、少々厄介な奴が関わっているからな」

「その厄介な代物を押しつけられるなんて、ただ者じやないでしょ？
ね？Bloody Eaterさん？」

「フン！」

「いで！？」

「ヴィンセント君？」

その耳の穴を田一杯広げて聞けよ？

俺の目の前でその名前を口にすんな、ぶつぞ

「いてて···もうぶつてるじやないですか」

「こんなもんぶつた内に入んねえよ」

「（メチャクチャな人だな···）」

「と、言つわけで、俺はこれから任務がある

それじゃ、また会おうヴィンセント君···なかなか格好いい名

前じやないか

『コウヤ君といい、中々クセ者揃いだな今回は「．．．あなたから見てどうですか？コウヤは「さあ、人の価値観なんざ人それぞれだ俺には何とも言えないね』

『ケチケチしないで下さいよ』

『ケチじやねえよ．．．まったく』

そのままMIG-701・コンドルに搭乗する

すると、無機質な機械音と共になんたらシステムが起動して、目の前が開けた荒野に早変わりする

俺の傍には、既にアルゴスメンバーがそこにいた

「よし、全員集まつたか？」

氣イ引き締めろ、これから連中がウジヤウジヤ出てくるからな『んなこたあ知つてんだよ、おっさん少し黙つてうー』

何やら目の前のACTVがうるせえな

「チビ助、フレンドリーファイアって知つてるか？背中には常に気を配れよ？

『うつかり）．．．何て事も有り得るぞ』

『へつ！お前もな！』

『はいはい．．．おーい、コウヤ！吹雪の乗り心地は如何？』

『．．．』

「なんだあ？アイツ何であんなに不機嫌なんだよ

朝飯食い損ねたのか？』

『オツム付きを押しつけられたからだろ？』

『何ソレ？吹雪のこと言つてるの？お前らアホだな』

アレはアレで結構な高性能機だぞ？練習機なんて失礼な名称誰が付けたんだか．．．』

『おっさんから見れば全部が全部、高性能機なんぢやないの？』

『言い得て妙だな．．．』

まあ、確かに昔と比べると随分進歩したものだ．．．人類は『

『？』

「あの頃はもっと酷かつたからな . . .」

「 . . . そう、昔と比べれば流される血の量は大幅に減つたと思う
それは人類が確實に歩みを進めている証、素直に喜ぶべき事柄
しかし、まだ足りない

まだ俺達は負けているのだ . . .

止まることは許されない終り無き旅路 . . . これを地獄と言わずに
何と言う? . . .

「！ . . . 来たみたいだな」

そんなことをボーッと考えていると、どうやら始まったようだ
荒野の向こう側から来るわ来るわ、巨大な津波の如く襲いかかって
くる

「そんじゃ . . . 始めよつか?」

今度は安全装置をしつかり外し、ジャコン . . . と突撃砲をリロー
ドする

仮想BETAか . . . 死ぬ必要がないから気楽で良いな

コウヤ side

『オラア!!』

『失せろやコラア!!』

迫り来るBETA相手に全く怯まずに攻撃を仕掛け、その侵攻を食
い止めている

“僅か2機で” . . . だ

『ヒュ〜 やるねえ大尉』

『案外、タリサと相性が良いのかしらね』

それに続くよつて、マカロニーと彫刻女も2人を援護するよつて立ち

回っている

俺もそれに続こうとしたときだった

「！？」

機体が不安定に傾く

バランスが全くとれないのだ

「（何だよ！？）イツは . . . 」

突撃砲の狙いを定めるのも至難の業だ
狙つて撃つたつもりが、全く当たらない

『何遊んでんだ！コウヤー！』

「ツ！すぐ行く！！」

しかし、跳躍からの着地で大きくバランスを崩してしまって
戦術機に完全に振り回されることに苛立ちが次第に募つていく

「おまけにこのバカみたいな数 . . . ！」

『泣き言か？トップガン！』

『Jの程度、アジアじゃ普通だぜ』

『ヨーロッパもなあ！…』

「ツ！（こいつら . . . ）」

此処にいる奴等は各々の腕を買われて配属されているのだ
侵攻を食い止め、撤退を繰り返し、そしてその繰り返し . . .
所謂、対BETAのスペシャリスト . . . 実戦経験から言えば自分
とは比べものにならない

「（だけどなあ . . . ）」

アルゴス1を背負つて居る以上、無様な姿は晒せない

「（言ひとおりにしのよ、ポンコツめ . . . ）」

自機にそう言い聞かせ、戦闘を続行した

重 side

『こちらアルゴス3

アルゴス1の位置から崩れ始めてきている』

『アルゴス4了解、ただし、こちらもそれ程余裕はないわ

「 . . . 」

『トップガンが足引つ張つてゐるぜ?』

「うーん . . . このままじゃ厳しいな

仕方ない、少し防衛戦を下げるぞ、各機援護していく』

『何嘗んでんだよ』

「 . . . 僕こじういうの苦手なんだよ』

『こちらアルゴス4、アルゴス1はどうするの?

私を含めて全員、他機を援護する余裕は無いわ

「 . . . みんなさんどうします?』

『 . . . 』

何で全員俺のこと見るんだよ . . . 言いたいことは分かるけどよ、
それは酷いぜ

「わかった、わかったよ

本物の戦場なら御免被るが . . . 』

生憎とこいはシミュレーションだ

こう言つちゃ悪いが、死の危険が無いため多少の無茶は効くだろうな
「俺があいつを迎えて行く

各機、位置を下げてスペースを取つといってくれ

『へ!根性見せてみろよ!おっさん』

『アルゴス3了解、まつ、頑張つて下さいよ』

『アルゴス4了解、程々にね』

「 . . . やつぱ誰か変わつてくれねえ?』

『無理だ』

『無理つすね』

『無理よ』

「……腹括るか」

即座に方向転換、アルゴス1の所へ向かう

「よつ、若者

頑張つてる?』

『……チツ』

「舌打ちしなくても良いでじょう……まあいいや

状況を手短に説明するぞ~

今から俺と一緒に後退する、前は俺がつとめるから援護コロロシク

『……了解』

まあ、仕方ないか

捉え方によつては”お前は足手まといだから後ろに下がれ”とも取
れるからな

しかし、この状況も分からぬ程馬鹿ではあるまい
プライドよりも任務優先なのは自明の理、此処で我を通せば隊全体
に影響を及ぼす

素直に後退するアルゴス1、その援護を受けて俺も前のBETAの
侵攻を最低限食い止めて下がり始める
すると、何でか知らんが援護の気配が止む

「どうかしたか?」

『チツ！弾切れだ！』

「しゃあねえな」

両腕に持つてゐる突撃砲の残弾数の多い方をコウヤの方へ投げる
それをコウヤは器用にキャッチした

「ナイスキャッチ、そいつを使え

『……アンタはどうすんだよ』

『心配ご無用』

片背中にマウントしてある長剣を片手に取り、この機体のカタログ
スペックにあつた武装を開ける。・・・

肘からショートソード程の長さの鋭利な突起物が顔を出した

さらに、膝付近からつま先に欠けても刃物が出てくる・・・何とも

言えねえぞ、コレ

「おお！かつけえ！全身刃物だ！」

『感心してる場合かよー。』

「まあ、前は任せなさい

どつちかつて言つと、ミドルレンジよりクロス・ショートレンジの方が得意だからな」

片手に長剣、片手に突撃砲を構えてBETAに突進する

「ひやつはー！こいつは面白れえ！」

BETAを切り刻みながらも、片手の突撃砲で牽制する

長剣は長さをもう少し縮めれば使いやすいな

「早めに後退しろよー、コウヤ」

『もう後退してる、アンタ深追いしそぎだよ』

「マジ?」

『よく周りを見ろよ』

「. . .」

360。全方位に群がるBETA
やべえ、また悪い癖が出ちました
夢中になると周りが見えなくなる・・・気がつけば取り返しのつか
ないことも何度かあつたな

「ヘルプミィイイー——————」

全速力でその場から退避する

正直、マジでやう、あい

「オイイイイイー！聞いてんのかコラフマー。」

『じゃあな、おっさん

尻ぬぐいはしねえぞ』

『右に同じ』

『貴方を助ける余裕はないわ』

『俺も同じだ』

「薄情な奴等め！血も涙もないのか！」

あ！待つて！通信切らないで！嘘だつて！」

しかし、無情にも全員から通信が途切れる

畜生共見てろよ……

「...おひさまひーす」

目の前に立ち塞がるBETAを切り刻み、突撃砲で風穴を開け、攻

撃を紙一重で過け、N

我が名に接にて こゝが才經一が選口の餌食にたるに御免かれ

雄叫びを上げながら突進む
・・・そして

『おお、おっさんスゲエな

素直に感心したわ

『流石熟練者、やる」ことが違ひ』

『格好良かつたわよ』

河二小方正

何とか防衛戦の方まで辿り着いた

あけにたけの怨念を込めて言い放つ

(お——こ——田は筋肉痛だ)

そう思いながら、再度アルゴスメンバーと共にBETA防衛に臨んだ

いまだのあたりだったたつけ？

希望を捨てるな

もう一生分の後悔と絶望を味わつただろう . . . ! ?
ならば、あとは振り返らずに駆け抜けるだけだ ! ! !

重 side

お馴染みの神無月重です

さうそく現状況をありのままお伝えします。

七

・・・大尉、静かにしてくれませんか？」

「なんでもたまにハサヰジミチ!!

「…散らしておいたのがアホの甘い仕事だ」

いや！ あたたか、また體立派ハ、ニ

「……膠糊はいき物いじめ二度今お静かに」

「馬鹿がこの話、一矢の報復をうけた。」

は放せ！放してくれ！！

俺は昔に戻つてあの頃の俺を殴り飛ばしてくるんだ！！

「ク、クソ——！」

「すまん、取り乱した」
「……別に、気にしていませんよ（鳴鹿なのか？ロイシゼ）」
「……すまん、」
「ふざけてるんですか？」
「頼む、言つてくれなければ俺はまた現実から逃げるや」
「……どうからどう見ても牢屋の中ですよ、俺達はソ連の軍事施
設に不法進入して拘束されてるんで す」
「それは所謂？」
「捕虜ですね」
「……銃殺刑は？」
「されても文句は言えませんよ」
「……」
「……」
「だ、だいじょーぶだよー」
「こんな時はー」
「……」
「でれでれつてれー”ぼーうしゃーすじー”

「これがあれば、どんなに硬い物でも削り取れる優れものなんだ
……なんでそんな物があるんですか？」

「俺にもわかんない

とにかく！これでの鉄格子をハシハシすれば外に出られるぞー！」

「……（今確信した、コイツ馬鹿だ）

「いいのかな？そんな目で見て

コレで俺が出されてもお前のことは知らんからなー。」

「勝手にどうぞ」

「フン！見でるよー！」

ハシハシハシハシハシ

ハシハシハシハシ

ハシハシハシ

「ハハハシ . . .

ゴシ . . .

カラソ . . .

「 . . . どうしたんですか？」

「 . . . これやつぱムリ」

「 . . . 」

「あー！もう疲れた、寝るわ

「最初から大人しく寝ててくださいよ

「言われなくともそうするワイ！」

鉄格子から離れて自分のクソ硬いベットに横になる

「お . . . ジーザス、何で硬さだ

だが甘いな、唯依ちゃんに比べればこんな物天と地の差だ
敢えて言うならスライムとオリハルコンほどの違いがある
そんな下らないことを考えていると次第に睡魔が襲つてくる
それに抗うのを止めると、自分は夢の中へダイブインした
. . .

声が . . . 聞こえる

これは悲鳴だ . . .

これは慟哭だ . . .

これは断末魔だ . . .

「（止める、聞きたくない . . . ）」

きつとこの声は俺が今まで耳にしてきたモノだ . . .

「（俺は . . . ）」

きつとこの中には助けられた筈の命もあつただひとつ . . . 救えた筈の命もあつただひとつ . . .

「（俺は . . . ! ）」

だが俺はその悉くを見捨てた . . .

「（俺は . . . ! ! ）」

それ以上に自分が助かりたかったからだ . . . 異常なまでに

「（俺は . . . ! ! ! ）」

俺にはそれを受け止める義務がある . . .なのに、何故

「（俺は悪くない！ ! ! ）」

何故、俺は逃げ続いているんだ . . . ?

「ツー！」

それは最悪の目覚めだ

まるで全身の穴という穴に汚物を流し込まれたかのよつだった
きつと夢のせいだ……そうに違いない

……悪夢だ、思い出しだけでも背筋が凍る

隣ではコウヤがウンウン唸つていた

多分俺と同じで悪夢でも見ているのではないか？

結構苦労してそうだもんな、コイツ……

「おーい、コウヤくーん、朝だぞー」

「……」

パチリ、目が開いた瞬間睨まれた

俺何かしたか？

それともアレか？

可愛い美少女じゃなくてむさ苦しいおっさん一步手前の野郎に起
されたのが気にくわなかつたのか？

だとしたら何て贅沢な奴だ、俺が抹殺してあげよう

「朝ですか……？」

「まあね」

妙に明るいから朝で間違いないだろ？

「これからどうなるんだろうな」

「さあ、知りませんよ」

「ドライだね～」

「……」

そんな黙りこくれても困るんだがな

そう思いつつ鉄格子の前まで来る

くそー、こいつ見ても忌々しいな、俺が軟体だつたら通れたものを

そんな事を重いながら不動の鉄格子と睨めつゝしていると

「！」

「どうしたんですか？」

「誰が来るな」

「．．．！」

そう、誰かが近づいてきたのだ

そして、その誰かの姿が露わになる

「！？」

そこには上物のスーツを着込んだ軍人が鉄格子の目の前に立っていた

その軍人は深く一礼をすると、こう告げた

「此度の非礼を深くお詫びいたします

我々は貴方方を歓迎致します」

「！？」

「（こ）いつはもしかすると．．．」

「中八九、”アイツ”の仕業だよなあ

「はあ、案内して貰おうか？」

「勿論で！」ぞいいます」

訳がわからぬえ、何なんだ？

俺が今いるところは、あのかび臭い牢獄とは無縁の場所だった
豪華な長テーブル、中央にはソ連の国旗らしき刺繡が編み込まれて
いる

それだけじゃない、テーブルの上には豪勢なワインや食事が置かれ
ている

「（一体どういう事だよ ）」

「ほれ、ボーッとしてないで適当に座れ」

何故か大尉は偉そうにどっかりと腰を下ろす

すると、傍にいた燕尾服の男がグラスにワインを注ぎ始めた

「何やってんだ？」

「 」

俺は内心動搖を隠しつつ大尉の隣に座る

「（これはどういう事ですか ? ）」

「（ああ、多分俺の知り合いの仕業だ

良かつたな）銃殺刑の心配は七割方不要になつたぞ? ）」

「（ . . . 残りの三割は? ）」

「（面倒事だ）」

「（ . . . ? ）」

「なあ、そうだろう?

ロゴフスキーのおっさんよ」

「 . . . 久しいな我が最高の同士よ」

迫力のある声が響く

次の瞬間、奥の扉から1人の男が現れた

「遠い昔のな

「そうつれないとことを言つな

「 ! ! 」

「何なんだ！？この男は！！」

本当に . . . 訳がわからぬえ！！！

やうだやうだ、じゅうわこえたあたりか

持つべきは友だ！！

どういうワケか癖がありすぎる連中ばかりだ
もつと普通の奴はないのか？

さて、会議室のような広さを持つこの部屋だが . . .
些か力オス空間と言つても過言ではないだろう

部屋の中央に置かれたテーブル、その上には豪勢な食事
奥の壁にはソ連の国旗らしき横断幕が堂々と掲げられている
そして、此処には不釣り合いな兵隊が2名と . . .

「（大尉 . . . あの人物は！？）」

「（ . . . ブドミール・ロゴフスキイ、ソ連のロシア人特権階級で
構成される中央戦略開発軍団に所属する重鎮の一人だ
ま、軍の階級で言えば中佐あたり . . . かな？）」

「（ツ！？）」

「何年ぶりかの再会 . . . か？我が友よ」

「さあな、俺としてはまた顔を合わせるとは夢にも思つてもいなかつたぜ？」

「君なら」コソコソと裏口から入らずとも、堂々と玄関から入ればいいものを

「逆にやつてみたい気はするな」

「はつはつは、少し寂しいだろ？が、微々たる持て成しを楽しんでくれたまえ」

「連れもいるが構わないか？」

「他ならぬ君の頼みだ、聞かぬ訳にもいくまい」

「寛大な心の持ち主を友に持てて俺は幸せ者だあ

「ふん . . . 心にもないことを」

と、言うわけで遠慮無しにかぶりつく
腹が立つことに留いんだわな、これが

．．．さて、今回の懸念事項がある
そいつを質問させて貰おつかね

「で、お前さんが今回の計画に携わっているところひとつは．．．何
かしらが起きるな？」

「今のお前には話す」とは出来ん．．．が、起こすつもりではいた
「ほつ . . . ?」

「君の祖国は中々面白いオモチャを開発しているそうだな？」

「まったく．．．もう情報が回っていたか」

帝国情報省は何やつてんだか．．．ある意味国家のトップシークレ

ツトを簡単に、それも何よりも厄介なこの男に知られてどうすんだよ

「今回の計画のタイミングを見計らつて接收する氣でいたが．．．

君が関わっているなら諦めざるを得ないな

「．．．ホントかよ」

「興味はあるが、そこまでして欲しい物でもない」

「まつ、その気になればお前さん得意の情報網で何時かは辿り着

きそうだな．．．」

「遅いか早いかの違いだ、何より嘗ての友を敵に回すのは気が引け

る

そこまで買われていたのか . . . 過大評価だな、良い迷惑だ
敵に回したくないのはこっちも一緒にだがな

「だが、別の物は頂くぞ?」

「 . . . すげえ嫌な予感がするんだけど?」

「それには及ばん . . . 例のプレゼントのデータを頂こうか?」
「やつぱりお前の差し金だったか . . . 全くふざけたモン送りつけ
やがつて」

「中々楽しめただろ?」

「どこに楽しめる要素があんだよ!」

「破棄した計画蘇らせやがつて、心臓に悪いわ!」

「私が人間を使つた実験などいつものことだろ?」

「お前は友人の扱いが乱雑過ぎるんだよ」

「そのくらいは見逃して欲しいものだな」

「ケツ! 元から取つていくつもりだった癖に何言つてんだか」

「やつ毒づくな、どちらにせよ今回日本のXF-1計画とやらには手
を引こう

心おきなく開発に専念してくれたまえ

「何様だよこん畜生 . . .

で、”衛士殺し（パイロットキラー）”の異名を取るあの機体、
乗るのは真つ当な人間じゃ無いんだろう?」

「何度も言つが . . . 今の君には、その先は言えんな
君がもう一度私の元へ来るというなら話は別だが?」

「丁重にお断りしよう」

「ならば質問には答えられない

今の君は私個人の観点では友人だが、公で見れば日本の尉官に過
ぎないからな

「へいへい、ご立派なことで . . . まつ、俺もそこまで知りたい内
容でもないからな」

「非情に残念だ、連れ戻せる機会をフイにしてしまったからな」

「ソ連を出る手助けをしたのはどこのどいつだ?」

「しらんな、そんな物好きは」

「何を白々しい」

一気にワインを煽る

程よい甘味と酸味がマッチしていて癖になりそうだ

「で、君は何時までそのスタンスを崩さないつもりだ?」

「ああ、”誰にも縛られず、誰にも犯されず、故に誰にも報われない” . . . つてヤツか? 無論行けるところまで

「大層な矜持だ、聞いていて笑いが漏れそうだ」

「喧しい」

「気をつけろ友よ、君には思つてはいる以上に敵が多い」

「既に身を持つて体感してゐる」

「私は今回手を引くが . . . 生憎とそつは思つてはいない輩が少なくともいるだらうな」

「それは何とかしてくれ、非常に困る」

「無論出来る限りのことはする、君は中央にも顔と名が効くからな . . . 抑止力にはなりうるだらうが、全員がそうなるとは思わないことだ」

「有り難い警告をどうもありがとさん、その時は自分で何とかする」

「そう簡単にいくと思うなよ?」

「国家というのは思つてはいる以上に複雑で粘着質だ、それを忘れるな」

「昨日の友が今日の敵、今日の友が明日の敵にならないことを切に

願うよ」

「私もそれだけは御免だ」

「. . .さて、じつそさん

「ここら辺でお暇させて貰おうか」

「帰りの足を用意させよう、暫し待て」

「そりや有り難い」

さて、皆さんはこの「ブドミール・ロゴフスキ」といつ男をどう思つてゐるか知らないが、1つだけ言わせて貰おつ

今の会話こそ寺の坊主の頭のように丸いが、實際は違つこの男の主成分は冷徹、非常、鬼畜……この三要素で大体ができる

嘗てコイツの部下的なポジションだった俺にはよく分かる目的のためなら手段を選ばず、障害となる者は迷わず切り捨て、どんな外道にも手を染める……そういう人間だ

いや、コイツを人間と例えるのは些か酷か……

とにかく関わつたら良くないことが起きる奴なのは確かだそんな奴に臆病者の俺が何で付いてるかって？

そりや、当時ソ連に雇つて貰つた時には味方皆無だったから強力な権力を持つ者に媚びるしかなかつたんだなこれが……

なんやかんやしていたら友と呼ぶ関係まで築き上げちまつた……向こうはどうだか知らないけどね

まつ、こいつの言い渡してくる仕事なんぞトラウマものばっかりだ先のような新型機のテストなんぞ珍しいものじやない、それに乗つてみたら安全基準を満たしていない物ばっかりなんてしょっちゅうだつた

他には自分の障害になる奴を殺してこいだの、成績不振な被検体を処分してこいだの……まあ、あの時代は本当に苦労したね

勿論BETAのいる戦場に放り出されたこともあつた

無茶苦茶な状況下だつたけどな……兎にも角にも人使いの荒い奴だつたな

まったく、ああゆう奴はつくづく正義感溢れるピカピカの主人公勇者様に倒されてしまふと思つちゃうよな……寂しくはなるけど自分で言つていてアレだけど、その可能性は俺自身にも否定できねえな

間違つても日の目を浴びる様な役柄じゃねえからな……やられ雑えな

数時間後 . . .

さて、ユーロン基地に帰つて来た俺達だがソ連側のお迎えは国境までだそうだ

ここからはウチのお迎えが来るらしい

「さつさと来ねえかなあ」

「（恐ろしい鱗片を垣間見た気がするぜ . . . ）」

・・・何やらコウヤ先生がさつきから黙りこくれてる
ロバースキーとの会話中ずっと大人しかったな

「 . . . ピビッてる？」

「ツ！？誰が！？ . . . ですか？」

「いや何となく

「何なんですか急に」

「いや、ユウヤ先生随分静かだな）．．．と思つて」

「．．．大尉こそ、嘗倉の中では思いつきり取り乱していましたよね？」

「アレは純粹に過去に戻りたかつただけだ」

「．．．（やつぱり馬鹿だ、このおっさん）」

腕は2流の癖にプライドだけは一級品だなどとが言つ顔してゐるぜ．．．別に否定はしないけど

否定するだけの材料が無いんだな、悔しいことに

「お？」

「？」

どうやらお迎えが来たようだ、さつさと戻るしますかねえ

今日は波瀾万丈、霹靂の連続だつたぜ．．．要するに濃い一日だつた

さてさて次の日

当然の如くユウヤ先生はテスト漬けである

先日唯依ちゃんに罵倒されたのにもかかわらずめげずに生きている姿は涙を誘うね．．ホントだよ？馬鹿になんてしてないよ？俺なんてあんな事言われたら一週間ぐらい部屋から出てこないもん

モニターではユウヤ先生は四苦八苦しながらハイヴ内を突進む

俺このステージ嫌いなんだよなあ・・・狭いし、暗いし、キモいし

「くあ・・・」

おっと思わず欠伸が漏れてしまった

「・・・」

隣の唯依ちゃんがギロリと睨みを効かす、なので慌てて欠伸をかみ殺す

だつてしうがないじやない暇なんだもの、他人の戦術機見てるのつまんないんだもの、興味ないんだもの

どうせなら俺もテストが良かつたなあ・・・口ゴフスキーム、早々

とコンドルを持ち去つていきやがつた

俺の手元に残つてるのは赤いラブター君のみ、既に完成してる機体

の何をテストしようと呼びたいモノだ

「（退屈だ〜、眠い〜、煙草吸いで〜）」

数々の煩惱が俺の心を誘惑する

だが、その程度で屈する俺じゃないぜ・・・嘘です、もう限界だ
さつさと落ちてくれユウヤ先生、俺を解放してくれコウヤ先生、そ
うすれば万事解決だ

「（それにしても粘るねえ）」

こいつは素直に賞賛ものだな

見たところ米国戦術機と日本戦術機ではコンセプトがまるつきり違つ
米国の軍人からすると恐らく理解不能な芸当を見せるだろうな、ウ
チの戦術機は

それは俺も身を持つて体感済みだ・・・國の数だけ戦術機がある、
そんな感じかな？

「（お・・・やつと落ちたか）」

まあ、最初の頃に比べれば随分と持つようになつたな

羨ましいぜ全く・・・これが若さってヤツかね

いや俺も十分若いよ？なのに今ひとつ自分の成長が感じられねえぜ
・・・」りやあ、参ったね

「・・・」

唯依ちやんがブツブツ言つて「る隙にそつとその場から離れる
「（絶妙のタイミングだ、よくやつた俺、さあ）褒美の煙草だ、咥
えたまえ」

咥えた煙草に火を付けながら歩いていく

あ？スプリンクラー？　．．．大丈夫だろ？

そのまま歩いていくと、目の前にコウヤ先生が見えた

「いよ～、おつかれさん」

「．．．どうも」

「はつはつは、疲れてるね～若者よ」

「どうでも良いんですけど、煙草臭いんで近づかないでください」

「まあまあ、一緒に喫倉入りした仲じやん？」

「（嬉しくねえよ）」

「ま、俺からすればよくぞ！」ままで成長したと言つてやりたいが

「おつと、後ろに唯依ちやんの反応アリ！」

「それを判断するのは生憎と俺じゃないからな～」

ちやつかりとコウヤの背後に回る

「じゃ、頑張つてね～」

そして全力疾走

室内で喫煙しているところ見られたら．．．考えたくもねえな

またわからなくなってしまった

人間つてのは危機的状況に陥れば陥るほど、"真価"を發揮する生き物だ

それは戦場で戦う兵士であれ、机上で四苦八苦する科学者であれそうだ

でも、それを發揮できる人間はほんの一握り……俺達はそれを"天才"と呼ぶのさ

「タリラ タリラ タリラフウツフウツ~」

どうも、重つす

ただ今、糞が付くほど暇なので格納庫内を地味な速度で歩き回っています

いやはや、どこを見渡しても整備兵が忙しそうに戦術機の周りを行ったり来たりしていますな……大変そうだ、同情するよ

しかし、そんな光景も悪くはない

何たつて最初は整備兵の方が良いと思った事さえあるこの俺だわざわざ命を危険に晒したくないというのに、全く人生どう転ぶか分かったもんじゃねー

「お?」

暫く歩いていると、見知った顔がいた

「いよお～ハルトウイック . . .」

やべ、素で話しかけちまつた

「 . . . 大佐殿、お元氣でしうか大佐殿」

「君か . . . いつも通りで構わんよ」

「感謝、感謝」

こいつの器の広さには脱帽だ

日本の上官だとまず”何だ貴様”とか”無礼だう”とか喚き散らすからなあ

無駄にプライドだけはアルプス山脈に負けないくらいのどうでもいい高さだからなあ、たまたまもんじやねえ

「で、なにやつてんの？」

「ああ、実は . . .」

「おお！これは例の言つていた日本の新型？」

「 . . . 相変わらず人の話を聞かない男だな

まあその通りだ、XFJ計画の根幹を成す戦術機だ」

「ほうほう . . . で、何か見た目不知火とあんま変わつてねえような気がする」

「それはそうだろう、そもそもこれはTYPE-94に米製パーツを組み込み、新世代に適応させる計画だ

大規模な改修となるとそれ相応の . . .

「つまりを言うところの突貫工事か」

「 . . . 言い得て妙だが、君の評価は些か辛辣すぎる」

溜息を吐くハルトウイック . . . なんか馬鹿にされてる？

「お待たせいたしました

ハルトウイック大佐」

後ろから突然男性らしき人物の声が掛かる

振り向くと . . . これまたビックリ、でこ眼鏡がいました（笑）

俺、コイツのこと知ってる気がするぞ

「自分の目で確かめないと納得できない性分でね

XF-1計画の根幹を成す機体の組み上げが遅れているとなれば尚

更だ

フランク・ハイネマン技術顧問「

おお、思い出した

確か日本でラプターを貰つた時に何かいたような気がしたな

「おや？」

と、そのハイネマン氏が「ひらりを向く

「んあ？」

「お久しぶりですね、シゲル中尉」

「今は大尉だよ」

「おお、これは失礼をしました

で、ラプターの方はどうですか？」

「無駄に性能が良いからな、これといって何もない」

「それは良かつた

引き続き、使ってやつて下さー」

「はいよ

「さて、話を戻しましょうか」

「そうだな．．．

今回の件だが、”戦術機の神様”とまで呼ばれたあなたらしくもない事態だが．．．説明して貰えないかね

「偉そうな名前だな」

「まったくだ

「ゴホン！

「えー、私」

「ときがそのような評を受けるに値するかは甚だ疑問ですが．．．

「茶を濁すんじゃないよ

ちょっと嬉しい癖に

「て、手厳しいですね．．．話を続けますよ

「ちからレポートは」覧になられましたか？」

「うむ．．．

さすがは米軍のエリートと唸らせられる出色的の出来だった

「私も技術屋の端くれとして彼のレポートには大いに刺激されましてね

この機体の可能性を引き出す為にも予定にない仕様変更を次々と加えたくなつてしまつたのです

つまり . . . 計画全体を俯瞰すればけつして単なる遅れなどではなく、むしろ進んでいると解釈すべきなのです

「ふむ . . .

ふむじやねえよ . . . 全く

そつちの都合で進めるな

「 . . . お前の解釈は別にどうだつて良いが、一つ忘れるなよ最終的にコイツに乗るのはユウヤ・ブリッジス個人ではなく、日本の兵士諸君だ

技術屋としてお前の言い分も解らなくはないが . . . 敵さんは待つてはくれないぜ？」

色んな意味でな、時間が無いのさ

「オプションを付けて喜ぶのは勝手だが . . . その代償として無駄な時間の浪費、扱いづらい機体に仕上がつたらボロボロ」

そこまで言い切る

しかし、ハイネマンはニヤリと笑つ

「十分心得てますよ

「よろしい」

不気味な奴だな

「開発主任の方はどうかね」

ハルトウイックが下で指示を飛ばす唯依ちゃんの方を見て言つ

「一兵士としては”極めて優秀です . . . ただ、柔軟性に乏しく、指揮官としての適正には疑問が残ります

日本の軍人には多いタイプですね」

「それは俺も大いに賛成だ」

「君の場合は私情と私怨が大半を占めているだろ？？」

「失礼だなコンチクショウ」

まあ、これは[冗談ではなく本音なんだが . . .
ユウヤもユウヤで上官に対する態度に問題があるのは事実だ . . .
しかし、篁唯依にも問題がある

頑固で意固地になつて、部下の声がまるで届いていない
結果、部下の懸命な訴えを聞き逃している可能性がある
互いが互いに問題を抱えてギクシャクしている . . . 戦場ではこれは致命的とも言える

ガキの遊びじゃないんだ、次の瞬間にはお陀仏しても可笑しくない
状況下 . . . GAME OVER!! 死に繋がる中、仲間の連携が最も重要、ましてや数で攻めてくるBETAなら尚更だ
これは衛士や機体の優劣に関わらずとも言えよう

つまりどちらかが歩み寄らなくてはならない、良い意味でも悪い意味でも信頼関係を築く必要がある

それが出来ないならご退場願おう、悪影響を及ぼすだけの足手まといだ

正しく百害あって一利なし . . . だな

「 . . . と言つことだ、解つたか?」

「 ? 」

「いや、何でもない」

「 . . . そう言えば、両国とは安全保障条約を巡つた確執があつた
な」

「それがどうかしたか?」

「 . . . よもや個人的な感情を任務に持ち込むとは思えんが、高度な任務ほど些細な人間関係の齟齬が障害となるものだ」

「 . . . 」

「 . . . それは』自身の経験から来るお言葉でしょうか? でしたら

そこから2人の会議に入ったようだ

俺は何となくその場を離れ、階段を下りていく

そして何となく、その試作機とやらの前に立つ

「 . . 戦術機 1 つ造るにしても、こつもうまくいかないとはねえ
みんながみんな、何かに拘りすぎてんだよなあ . . 人はそれをブ
ライドとも言'づ

そりやまあ、人の数だけ国の数だけあるだろ? よ
色々な国々、数多の人々を見てきたが . . どうも理解できないわ
そんなもん捨ててしまえば、後は楽な一本道 . . なのに人類自らや
やこしくしている

なんとなーくフレームに触る、ひんやりとした感触が少し気持ちいい
多分コイツにも利権やら利益やらが凄く絡んでいるんだろう? よ

「 . . お前はどう思う?」

B E T A と戦うために在るのに、人間の思想や思惑で俺にはお前
がガタガタのドロドロに見えてくるぜ?」

手を放して暫く眺める

「 . . まあ、別に何かを期待していた訳じゃないがな

「シゲル君、そろそろ我々は戻るぞ?」

気がつけばハルトウイックが後ろにいた

「俺はもう暫く此処にいるさ

頃合いを見て戻る」

俺は彼等に背を向けて歩き出す

「最近ラプターをほつたらかしだつたからな

今頃拗ねているだろうから、面倒見に行つてくるのを

「分かつた、満足したら連絡を寄越せ

迎えの足くらいは用意させよ?」

「あんがと」

重と別れてから暫くして、4人は軍用車に乗つて走り出した
一通り会話を終えたところで、ハルトウイックは嘗てより抱いていた疑問を口にした

これは個人的な興味と言つても良い

「簞中尉」

「はっ」

「日本人である君の視点から見て、彼をどう思う」

「あ・・・」

「何でも良い、君たちの祖国を捨てた彼を君はどう思う?」

「・・・」

「非難、侮蔑、罵倒でも何でも良いぞ?」

「あの、大佐は大尉と・・・」

「ふむ、良き友でもあるが・・・彼の行為は褒められたものではない
認めてはいけない許されざる行為だ
もし私が日本人なら、彼を許すことは出来ないだろうな

「・・・仰るとおりです

大罪を犯した彼を何故、咎めずに生かしておく理由があるのか
私は、その現状に甘えて愉快そうに笑っている彼を見ると、どう
しようもない怒りがこみ上げてきます」

「ふむ

「

「それだけかね？」

「 . . . はい」

「そうか」

「

「彼が我が国で戦つてゐるときだつた

「？」

「これはあくまで私から見た彼だが

「彼はまるで何かに取り付かれたかのように狂つた戦いをする男だ

つた

「

「他人の人間からは、必死に我が祖国を守るために戦つてゐる様に見えたそうだが

「私は失つた何かを必死に取り戻そうとしているかのようだつた」

「 ! !

「余計な事を言つたかね」

「いえ、出来ればもう少し聞かせて貰えないでしょつか？」

「ふむ、構わんよ

「私としても良い暇つぶしだ」

「Blood Eater」の話ですか

「私も興味がありますね」

「そうだな、何から話したらいいものか

『叶うなら彼を、彼の心を癒してやりたい

叶うなら彼の傍で”お前は一人じゃない”と囁いてやりたい

叶うなら彼を抱きしめて、私の温もりを分けてやりたい

でも、今の私では駄目なんだ

触れることがすら叶わない . . .

どうすればいい? 誰でも良い、教えてくれないか . . .

「 . . . (やつぱり) 、彼女の綿のよつた言葉が今でも鮮明に覚えてこるな)」

たぶんじゅうべらいかな

自分が特別だつて思ったことはあるかい？

俺は何度もある・・・そつしなければ俺はおかしくなつてしまいそうだから

でも、その度に痛感する

俺は普通の人間・・・いや、それ以下の最低なクズ野郎だとね

『俺を雇え』

彼が血を啜る者の二つの名を手にする数年くらい前のことだ

彼が最初に言ひはなつた言葉がこれであつた

西ドイツの基地内に堂々と現れた東洋人

黒髪黒眼の身長が一八〇くらい・・・まだ彼こと神無月重が青年と呼ばれる年頃だつた

当時私たちの耳にも、前線を渡り歩くイカレた男の噂が届いていたのだった

まあ、私は眉唾物だと思っていたのだがね

そして彼はこうつづのさ

『報酬はいらない

欲しいのは最低限の衣食住と戦術機だ

その代わりに俺は戦力を貸す』

誰もが啞然となつたよ

その後、駆けつけた兵に取り押さえられたのは言つまでもない
當倉に叩き込まれたのもな . . .

ただ、気になるのはそこが比較的大きな基地だつた事
警戒態勢は万全だつたと言つのに、どこから進入したか誰も気がつかなかつたという

当時の私は少佐の身であり、その基地の最高責任者だつた
と、言つのもここまであつたり進入させられたんだ
上層部に何を言われるのか . . . 私は彼を使うことに決めた
殺すにしても後々面倒だ、何より意味がない
私は彼の目の前に行き、一いつ告げた

『君、名前は?』

『 . . . アーモンド、そう呼べ』

偽名だつたがな

『アーモンド君、私は君を使つことにした

後悔するな、泣き言は聞かんぞ』

『そりゃい』

脅すように言つたつもりが、笑われてしまつたよ

「これが私と彼の出会い

今から約十数年前の話だ』

「 . . . 」

「大胆不敵で運の強い男ですね

自分の命でさえも勝負事にかけてしまったと言つことですか」

「そうなるな

そして私は負けて、彼は勝つたと言つことだ

だから私は彼の望む物を与えたよ

風雨が凌げるだけの極寒の寝床

使い古した軍服

最低限度、それこそ余り物の残飯のような飯

当時彼の扱いは一番最低であった

その基地では彼のことをExkrementefliegen.

・ドイツ語で糞蝇と呼ばれていたほどだ

だが、私にはどうすることも出来ない

彼が望んだ事でもあり、そして彼を特別扱いするわけにもいかない
なぜなら、彼は公式には“いない”だからな

彼は常に前線を見張っていた

”見殺し可能な便利な兵士”

それが彼の唯一の存在意義、もし敵を見つけたのなら彼が何らかのアクションを起こす。我々はそれを相図していた

今にも崩れ落ちそうな戦術機で今日も前線を見張る

もしBETAに遭遇したら真っ先にそれを知らせ、部隊が来るまで孤立無援状態を生き残らねばならなかつた

弾薬も不十分、機体の整備は劣悪、騙し騙しの方法がいつまで持つ

か・・・

彼の任務はロシアンルーレットよりもスリルの高いものであった
例えその日が何事もなくても、基地に帰還しても彼を労う者は誰も
いない

いたとしても侮蔑や嘲笑の眼差しだった

そしていつも通り残飯を漁り、痛みすら生ぬるい冷たい水で体を洗
い、そして暗い倉庫内で眠り、数時間後、数十分後には呼び出しが
掛かり、前線へ送られる・・・その繰り返しであった

ある日の事・・・

その日はBETAの襲撃があった
しかし、それ程大規模なものではなく、旅団クラスが1～3回の波
状攻撃を仕掛けただけであった
部隊としての損害は軽微であり、帰還した部隊の連中はこぞって近
くの町まで遊びに行っていた

『全く、下の者は気楽で良いな』

と、愚痴りながら自分の仕事をこなしていた
気分転換がてら、一端手を止めて外を見る。・・・いつの間にか雪が
降っていた

幻想的な光景は戦いという言葉を忘れてくれるかのよつだつた
ふと、視線をずらす

『?』

ずらした視線の先には戦術機のハンガーがある。・・・しかし、今現在そのハンガーには誰もいないはずなのに明りがついていた
私は怪訝に思い、そのハンガーへ足を運んでいた
中を見ると、装甲が欠けて塗装が剥げ、内部の配線が所々むき出しとなつたボロボロの戦術機が一機と、その周りで作業をしている人影が一つ

言うまでもない、彼である

『何をしている?』

私は彼の声を掛けた

『見てわかんねえのか? 機体の整備だよ』

『一人でか?』

『やらないよりはマシだろ

潤滑油を差すくらいうなら一人でも出来る』

『! ! !』

一瞬言葉を疑つた

確かに一人でも可能だろう。・・・だが何十、いや、何百ヶ所あると思つているのか!?

大人数で整備するから大したこと無いと思われがちだが、自動車を整備するのとではワケが違う

『今までやつてきたことだ、一々気に留めてんじゃねえよ』

『・・・』

『ああ、そうだそうだ

これ終つたらアンタ命令してくれよ』

『なんだ?』

『今日は調子が良いんだ
前線に行かしてくれよ』

『!?』

この男は何を言つてゐるのだろう?

自分を戦場に放り込めだと?

私にはこの男が恐ろしい何かに見えて仕方がなかつた

『お前は . . . 死ぬのが恐くないのか』

『恐い、ものすごーく恐い

出来れば言つて欲しくない』

『では何が狙いだ? 英雄願望か?』

『そんなん下らないものに興味ない』

『では何だ? 何故そこまでして戦場に身を置くつとする?』

『. . . なあ』

『なんだ』

『”あの時”いうしておけば”とか”あんなことしなければ” つて思つたことある?』

『人間誰しも一度はあるだろ? な』

『その時お前だつたらどうする?』

『その経験を生かし、次に繋げるのが最良だ』

『ふーん、立派なモンだな』

『. . . 』

『俺はね、そこまで立派じゃねえからな

そういう事実があつたとすればソレから逃げたかった
でも、それをよしとせずに責め続ける自分がいる
だから、逃げたくても逃げられない
難儀な性格だと思わねえか?』

その会話で確信したよ

この男は何か企んでいるわけでもなく、ましてや何かを望んでいる
わけではない

ただ、何をしでかしたかは知らないが……彼の言った”あんな事”があり、その過ぎ去った瞬間、失われた時間を正しく取り戻そうとしている

或いは代わりをその”あんな事”に見立てて、その瞬間をやり直そうとしているのだと……

「馬鹿な男だと思わないかね

そんなことをしても傷口が広がる一方、苦しみがどんどん増していくだけだというのに……

だが彼はそのスタンスを見事貫いた

死にたくない、戦いたくないと思いながらも、戦うしかない、戦場以外生きる道はないという矛盾を孕んだまま今日の今日まで生き残ってきたんだ

私には、それを否定することはできん

「……」

「で、貴方は彼をその後どうしたのです？」

「前線に放り込んださ、私は使えるモノは使う主義でね
その時、かなり顔を歪めて私を睨み付けたが……ビ」となく、
安堵感を纏ついていたな」

「自分では逃げ道を中々封鎖できない、だから他人に逃げ道を潰させたんですね」

「そう言つことだな

その後だが . . . いや、今回はこれまでにしておいた
丁度到着したようだ

「そのようですね

「さて、ここからは別の意味でも戦場だ
氣を引き締めて取りかかれ、以上だ」

もつとふたこととかじりでもいいや

失った時間は取り戻せない・・・それは自明の理
たとえその1分1秒、あるいは瞬きする瞬間にバカをやつちまつた
らもう取り戻せない

コンマ0・1秒でも過ぎ去った過去だ、それに代わる瞬間なんて来
やしないんだ

さて、君たちは後悔はしたことあるだろうか?

失恋? それとも犯罪? さては掃除当番のサボリとか・・・まあ、そ
んなのは人それぞれだ

後悔のない人生を歩んでいるなんて奴は絶対にいないだろう
もしいたとしたらソイツは人間じやない、もしくは極上のつまんね
え奴だ

後悔・・・人は後悔するからこそ成長する

罪悪感や悔しさを実感して未来に繋げることが出来る・・・

だがな・・・

だが、まれに大馬鹿な奴がいる

何時までもウジウジと自分の犯したバカな行為に縛られて、盲目に走り続ける愚か野郎だ

走り続ける・・・というのは語弊があるな、正確には逃げ続けていふと言うべきか

こういう奴に限つて自分の過去にちよこつこつと触れただけでも激怒しやがる

過去と向き合いたくないから、何時までも逃げてみたいから、ほじくり返されるのは特別我慢ならないんだ

そして決まって碌でもないことをしでかす

自分に対して盲目になつてゐるから余計に質が悪い
他人がどんなに迷惑を被ろうと構いやしねえ・・・常に保身に走る、正当化しようとする

理由は至つて簡単、自分が誰よりも可愛いからだ

日常生活でそんな奴いたら間違ひなくハブの対象だわな
そんな自分本位の大バカは俺は一番嫌いだ

だから、俺は俺が一番嫌いだ・・・だけど、俺は一番自分が可愛い
こんな矛盾、いつかは断ち切らなければならぬ

この任務が終るまでには腹を決めねえとな

「・・・なーんて、いつになく真剣に考えてんだ?俺といふ馬鹿は
寝つ転がつた状態で自分のほっぺに拳をきます

痛くはない、脳が自傷行為だと判断して力をセーブしてゐせいだ、
その事を思うと何故かイライラする

だが、そのイライラでさえもダルイ・・・何でか知らねえけど

今現在、完成した不知火・式型をつんだトラックの荷台に横になつ

ております

このトラックの目的地と俺の目的地は奇しくも一緒なのである

「ふあ . . . 眠」

今日は何故だか憎たらしいほどお天気が良好だ
ものすごーく眠気を誘う . . . あ、やべ、早速負けそうだ
数秒もしない内に夢の世界へと足を運んだのは言うまでもない

．．．人を殺した経験がある軍人は帝国で何%くらいいるだろうか？

多分それ程いないんじゃないだろうか、現在の軍のあり方とは対B
ETAであり間違つても人間じゃない

ましてや国家間戦争などこここのところあんまり起きて無いような氣
がする

言い換えれば、そんな隙を与えないほどETAの侵略というのは
驚異的なのだ

さて、話を戻そうか

俺はその数少ない”殺人組”に入る人間だ

初めて殺したのは国外逃亡を図った時 . . . 邪魔だった兵士を何人
か殺した

アイツらにとつては無念だつたに違いない

国民を守るべき衛士が何故、国民である自分を殺さなくてはならな
いのか

俺だつたらソイツを化けてでも復讐してやるね . . . 末代まで呪つ
てやるよ

国を出た後の俺だが . . . 結構好き勝手やつた

衛士という命のやりとりを持つ重責から解放された俺は最高に気分が良かつた

多分人生で一番高揚していたんじゃないだろうか？

まつ、兎に角俺は背中に翼が生えた様な気分だったが……ソレが冷めた後は最悪だった

人を殺したという罪悪感と逃げ出したという後悔が毎日のように俺を押し潰さんと、襲いかかってきたからだ

数ヶ月のうち回った俺は、遂に腹を決めたワケだが……

そんな事になるなら最初からやらなきゃ良いのにな、本当に馬鹿だ

よーーー！

ハツとなつて目が覚める

「…」

はて、どんな夢を見ていたかーなんてのはお約束通り忘れてしまうモノなのだ

「ふあ…」

未だトラックは揺れている

目的地はそこまで遠くなかったような気がしたが……とすると俺が眠っていた時間なんてのはものの数分と言つことになる……不思議な事もあるものだ

そつこりしていると、トラックはあるハンガーの前で速度を緩め始めた

「（漸く目的地に到着か……）」

荷台から降りて、巨大な鉄の扉が開いたことを確認すると、そちらへ歩き出す

「お？ 大尉、おはよう」ぞいます」

「おー、ヴィンセント君じゃないか」

「これが例の式型ですか」

「そ、漸く組み上がった所だ」

「それにして、スケジュール的には遅れていたんじゃないですか？」

「気にするな」

唯ちゃんなりの地味な気遣いだ

これでユウヤ先生もちょっとは大人しくなんじゃねえの？」

「確かに、『何で俺が練習機に』．．．って愚痴つてた時期もありましたからね」

「拗ねてからじゃ色々と面倒だからな

全く、試験衛士なんてガキと一緒にだな」

「はは、少し共感できますよ」

「つまり、お前はパパ役というワケか」

「まあ、そんなところです」

「なあ、聞いてくれよ

お宅の息子さんが何故か俺に冷たいんだ

「あー．．．あいつ日本嫌いだから」

「何やら込み入った事情がありそうだな」

「察して貰えると助かります」

「へいへい、詮索はしないでやるよ

しかし、日本嫌いか．．」

それなら俺や唯ちゃんへのあの態度も頷けるな

やれやれ、嫌いな日本人上司が2人か．．同情するよ、ユウヤ先生

俺だって嫌いな上司の1人や2人はいて、そいつが来ると嫌だもん

「しかし、何とかなんねえかな．．」

困った困った

これでは計画全体に支障をきたすぞ

ガシガシと頭を搔く　．　．　．そんな事しても知恵は湧いて出でこねよ

「ま、上官の苦労は全然分かんないですね」

「だろうよ

まつたく、下の奴等は良いよな」

ただ戦うだけ　．　．　．

その時、ぴーん！と閃きがともつた

「どうしたんです？」

「．　．　．いんや、ちょっと用事思い出した」

「？」

「あとよろしく～」

これは一種の賭かも知れないが　．　．　．まあ、やつてみるか

俺は基地内を走つて走つて走る、着いた先は　．　．　．

「旦那！！！」

「神無月大尉、どうしたんですか？」

イブラヒムの旦那　．　．　．この人の協力は不可欠だ

「ちょっとあの吹雪に用事があるから借りるわ

それと　．　．　．

「シゲル　．　．　．ちょっと待つてくれ

話が見えないんだが　．　．　．

「ああん？

面倒臭えな　．　．　．单刀直入に言うと

アルゴス小隊をしばぐんだよ！――！」

「　．　．　．は？」

「だから協力しろ」

「これは戦争じやああああああああああああああああああ――！――！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9789r/>

Sacrifice

2011年8月16日20時58分発行